

琉球政府立博物館
館 報



1972
No. 5

琉球政府立博物館

目 次

序.....	外 間 正 幸.....	1
沿 革.....		2
館内案内図.....		3
機構及び職員構成.....		4
予算の推移.....		5
所蔵資料現在高.....		5
資料購入点数の推移.....		6
当館所蔵の指定文化財.....		6
施設使用状況.....		7
入館者数.....		9
主なる新収蔵品写真.....		10
新収蔵資料.....		12
新収蔵図書.....		16
博物館主催行事.....		19
1. 当館所蔵書跡及び関帝王展.....		19
2. 日本古美術展<くらしの中の美>.....		20
3. 当館所蔵紅型型紙展.....		23
4. 当館所蔵厨子髹展.....		24
5. 民具資料展.....		25
6. 当館所蔵指定文化財展.....		26
7. 当館所蔵「バナリ焼」展.....		27
職員の活動状況.....		28

研 究 及 び 調 査 報 告

粟国島巢飼原貝塚調査概報.....	新 田 重 清.....	29
荒焼の判について.....	宮 城 篤 正.....	39
沖縄の貝具.....	上江洲 均.....	56

序

今年の、サントリー美術館と共催の「日本古美術展」は、当館開館以来かつてない盛況を呈した。これは、もとより協賛団体其他のご支援の賜ものではあるが、同時に県民の文化に対する意識の高まりでもある。

その意味で、このたびの成果は、沖縄の人びとに、日本文化の真髄を理解させたのみでなく、博物館活動にも多大の影響を与えたものと感謝している。

さらに、佐治敬三館長は、博物館の造園と植樹のために、多額のご奉仕を賜わった。幸に今年は館周囲の柵も施設されることになり、樹花木も充分に管理出来ることと思う。

われわれは、このご厚意にむくいるべく、館の内外を立派にし、文化の殿堂として、かつ、県民にも親しまれるよう、体制を整え、本土復帰に備えたい。

1971年12月30日

琉球政府立博物館長

外間正幸

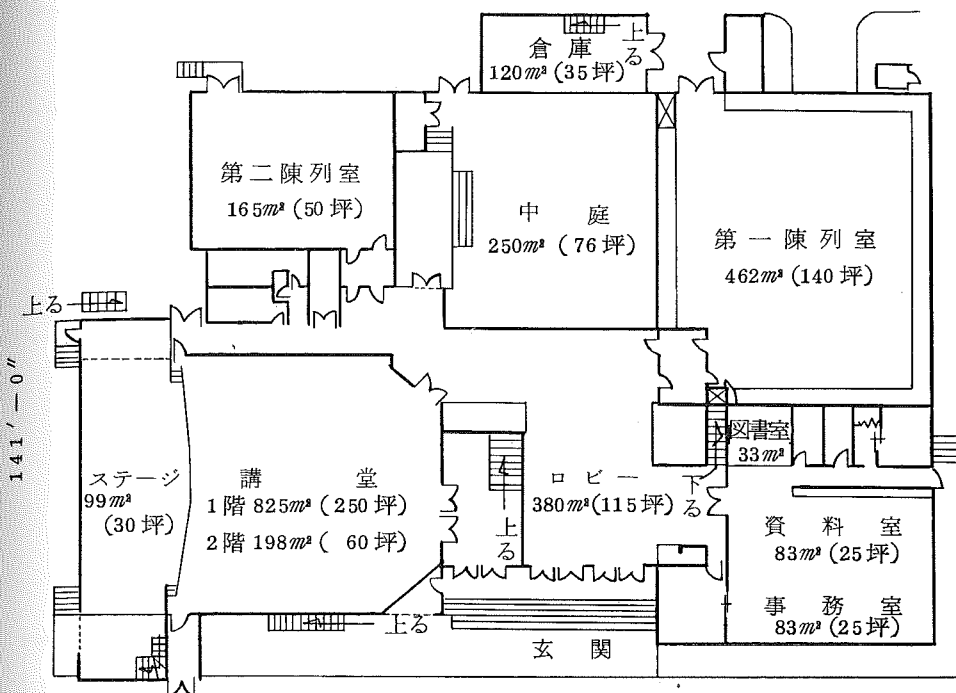
沿 革

(1971年1月～1971年12月)

- 1月14日 東急ホテルにて、サントリー美術館と共催の「日本古美術展＜くらしの中の美＞」開催計画の発表並びに披露パーティーを行なう。
- 2月 2日 八重山出土の陶器類約500点、検察庁より譲渡さる。
- 13日 当館所蔵「書跡及び関帝王展」を開催。28日まで。
- 16日 「日本古美術展＜くらしの中の美＞」写真展、沖縄三越にて開催。
- 20日 「日本古美術展＜くらしの中の美＞」一般公開。4月18日まで1ヶ月間。ホールにては美術展関連の映画及び「白拍子の舞」など上演、和歌森太郎氏、鎌倉芳太郎氏、阿波根朝松氏、山里永吉氏らによる文化講演会も催さる。
- 4月17日 サントリー美術館より「日本古美術展＜くらしの中の美＞」開催を記念して博物館へ一万円相当の樹花木の寄贈があり、植樹式を挙行して目録の贈呈がなされた。
- 5月 1日 「紅型々紙展」を開催。26日まで。
- 28日 那覇市制五十周年記念「歴史、民俗資料展」第二会場として第一、第二陳列室、ロビー開放、7日まで。
- 30日 博物館々報第四号を発行。
- 6月11日 「厨子甕展」を開催。8月25日まで。
- 7月10日 フェンス工事竣工。
- 9月 1日 ヤチムン会、当館共催の「民具資料展」を開催。26日まで。
- 12日 国務大臣、山中貞則氏博物館視察のため来館。
- 29日 南日本新聞社主催の「沖縄文化展」へ資料貸出す。10月21日全資料返納さる。
- 10月 5日 ロビーにて「パナリ焼」を展示する。
- 27日 「写真にみる戦前の沖縄展」を開催。11月7日まで。
- 12月 1日 琉球政府文化財保護委員会と共催で、文化財保護週間に因み、ロビーにて写真展、ホールにて組踊及び映写会を公開する。
- 8日 サントリー美術館寄贈の植樹造園工事完了。竣工検査。

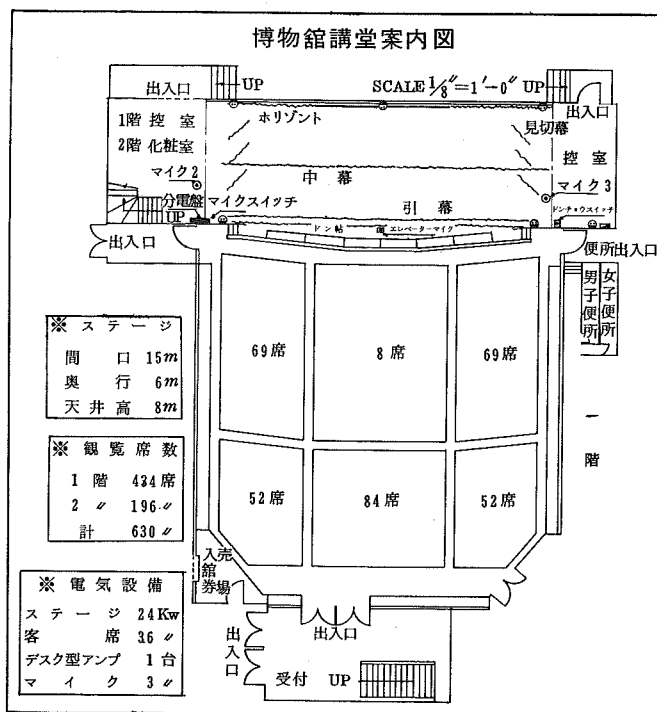
館内案内図

197' - 8"



平面図

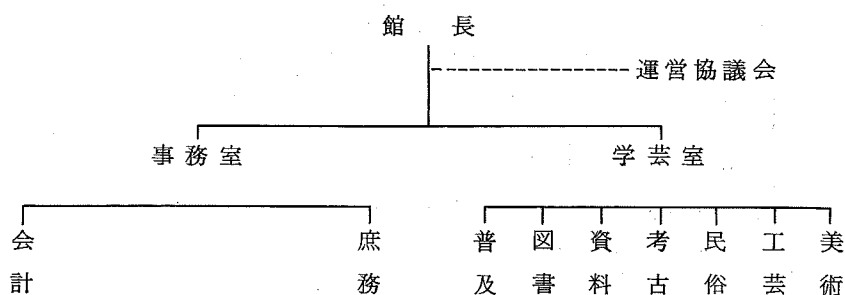
博物館講堂案内図



講堂平面図

機構及び職員構成

1 機構



2 職員構成

職名	職員数	職員名
館長	1	外間正幸
学芸職	4	新田重清(考古) 大浜用光(美術・工芸) 上江洲均(民俗) 宮城篤正(美術・工芸)
事務職	4	崎山孝子 津波古久子 仲松正子 仲松富子
電気職	1	黒島惇
作業職	1	与儀ウシ

3 職員の異動状況

退職 大城精徳 玉城盛勝
 転入 新田重清(浦添高等学校より) 大浜用光(総務局広報課より)

4 博物館運営協議会委員

学校教育関係	末吉安久(画家・染織研究家)
	大山盛幸(首里山川町自治会長)
	山元恵一(琉球大学美術工芸科助教授)
社会教育関係	与那覇修(文教局社会教育課長)
	金城徹(那覇連合区社会教育課長)
	宮城元信(中部連合区社会教育課長)
学識経験者	池村恵興(文教局指導部長)
	源武雄(琉球政府文化財保護委員長)
	山城善三(沖縄県史編集委員)
	阿波根朝松(沖縄文化協会々長)

予 算 の 推 移

年 度	定 員	当 初 予 算 額	内 容		
			運 営 費	資 料 購 入 費	事 業 費
1967 年 度	7	41,403 ﾄﾚ	18,635 ﾄﾚ	1,500 ﾄﾚ	21,268 ﾄﾚ
1968 年 度	11	62,463	29,473	1,500	31,490
1969 年 度	11	45,419	39,299	1,500	4,620
1970 年 度	11	67,961	41,761	1,200	25,000
1971 年 度	11	49,834	42,431	1,193	6,210

所 蔵 資 料 現 在 高

(図 書 資 料 を 除 く)

1971 年 6 月 30 日 現 在

分 類	収 蔵 別	購 入	寄 贈	合 計
A	絵 画	60	29	89
B	書 跡	69	113	182
C	彫 刻	10	182	192
D	建 築	0	5	5
E	陶 磁 器	384	1,232	1,616
F	染 織	713	143	856
G	漆 器	154	124	278
H	金 工	8	66	74
I	歴 史	0	7	7
J	貨 幣	1	71	72
K	楽 器	4	15	19
L	装 身 具	64	57	121
M	民 俗	158	406	564
N	考 古	0	80	80
O	そ の 他	2	9	11
X	自 然	0	35	35
合 計		1,627	2,574	4,201

資料購入点数の推移

(1961年～1971年)

分 類	年 度	1961	1962	1963	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	合 計
A	絵 画	4(18)	1(1)	5(5)	1(1)		1(1)						12(26)
B	書 跡	5(6)		1(1)	14(16)								20(23)
C	彫 刻												0
D	建 築												0
E	陶磁器	5(6)			1(1)	3(3)		2(2)	21(24)	13(14)		15(15)	60(65)
F	染 織	4(4)	1(1)		5(5)			2(2)					12(12)
G	漆 器	10(11)	1(1)		11(11)	6(6)	3(3)	6(10)	2(3)	2(2)	3(3)	2(2)	46(52)
H	金 工					1(1)		1(1)					2(2)
I	歴 史												0
J	貨 幣												0
K	楽 器					1(1)		1(1)					2(2)
L	装身具					1(1)	1(1)						2(2)
M	民 俗	1(1)	1(1)			1(1)	1(1)		1(1)	16(19)		46(46)	67(70)
N	考 古												0
O	その他									1(1)			1(1)
X	自 然												0
合 計		29(46)	4(4)	6(6)	32(34)	13(13)	6(6)	12(16)	24(28)	32(36)	3(3)	63(63)	224(255)

(注) () の前は件数、() 内は点数を表わす。

当館所蔵の指定文化財

特別重要文化財

名 称	種別	指定年月日	備 考
木彫円覚寺白象並びに趣意書木札	彫刻	1958. 3. 14	全長 120cm 頭高 61.2cm 胴廻り 93.9cm
世持橋勾欄羽目	"	"	高さ 33.3cm 横 80.6cm
志多伯開鐘(三味線)	工芸	1955. 5. 23	全長 77.2cm 糸蔵 3.5cm 重量 440g
旧首里城正殿前梵鐘	"	1958. 3. 14	高さ 154.5cm 口径 94cm 重さ 600kg
評定所格護定本 おもろさうし	典籍	"	22巻
評定所格護定本 混効験集	"	"	縦 25.5cm 横 20cm 枚数 227枚

重要文化財

名 称	種別	指定年月日	備 考
玉陵石彫獅子	彫刻	1956. 12. 14	2基 各高さ 1.17m 胴廻り 1.21m
聞得大君御殿雲龍黄金簪	工芸	"	全面黄金張 全長 28.4cm 直径 11cm
黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	"	"	重量 21g
黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀	"	"	高さ 16cm 縦 41cm 横 31cm 重さ 2.29kg
黒塗螺鈿雲龍文内金箔蓋付椀	"	"	高さ 14cm 縦 40.8cm 横 31.7cm 重さ 3.45kg
三味線「江戸与那」	"	"	3口 高さ 11.8cm 重さ 160g 直径 12cm
宮古島下地の首里大屋子への辞令	古文書	"	全長 80cm 心長 21.6cm 糸蔵 4.8cm 重量 503g
評定所格護定本 中山世鑑	典籍	"	縦 28.5cm 横 82.5cm
評定所格護定本 中山世譜	典籍	"	6巻
			19巻

施設使用状況

1971年1月～12月

1. 講 堂

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名	人 員
1. 9	考古学研究発表会	沖縄考古学会	120
23～24	生徒会クラブ発表会	浦添高等学校	1,500
31	陸上競技研究発表会	沖縄学生陸上競技連盟	100
2. 2. 3. 16. 21. 23. 24.	演 劇 教 室	劇団たんぽぽ	5,000
5	琉舞鑑賞会	沖縄タイムス	100
3. 6	P T A 講 座	城西小学校	100
3.20～4.18	日 本 古 美 術 展	博物館・サントリー美術館	22,900
5. 8	臨 時 総 会	琉球史料研究会	20
15	組踊伝承者の集い	組踊保存会	40
6. 13	小 演 奏 会	琉大音楽科	150
20	ピ ア ノ 発 表 会	石垣勝子ピアノ教室	150
7. 10	ギ タ ー 演 奏 会	琉大ギターアンサンブル	150
17	フ ァ ッ シ ョ ン シ ョ ウ	琉大被服サークル	100
24	総会及研究発表会	沖縄考古学会	200
25	ギ タ ー 演 奏 会	沖縄県高校ギター連盟	200
8. 13～14	民 謡 録 音	九学会連合沖縄調査委員会	30
17～18	映 写 会	沖縄県自主上映委員会	1,500
9. 12	ギ タ ー 演 奏 会	沖縄県高校ギター連盟	200
19	全琉小・中・高校合唱コンクール	沖縄音楽教育研究会	630
25～26	フォーク同好会の集い	沖縄フォーク同好会	630
10. 17	定通制生活体験発表大会	沖縄県高等学校定通制主事会	200
29～30	文化祭のステージ発表	真和志高等学校	2,400
11. 2～3	組 踊 映 写 会	首里文化祭委員会	200
6～7	演 劇 慈 善 公 演	首里奨学母の会	800
13	家庭クラブ南部地区研究発表大会	全沖縄家庭科教育研究会南部支部	400
27	英 語 劇 発 表 会	琉大 Y M C A	400
28	箏 曲 発 表 会	琉大箏曲クラブ	200

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名	人 員
12. 11	NHK青年の主張全国コンクール 沖縄大 会	O H K	630
12	フォークソングコンサート	沖縄フォークソング同好会	400
17	英 語 劇 発 表 会	琉大英語クラブ	200
18～19	琉大祭公演	琉球大学	1,200
26	全沖縄高校家庭クラブ研究発表大会	全沖縄高校家庭クラブ連盟	630

2. 第2陳列室

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
1. 20～ 1. 31	洋 画 個 展	与那覇朝大
2. 13～ 2. 28	当館所蔵「書跡及び関帝王」展	博 物 館
3. 4～ 3. 7	卒 業 展	琉大美工科
3. 20～ 4. 18	日本古美術展<くらしの中の美>	サントリー美術館・博物館
5. 1～ 5. 26	当館所蔵「紅型型紙」展	博 物 館
5. 28～ 6. 7	歴 史 民 俗 資 料 展	那覇市・博物館
6. 11～ 8. 25	当館所蔵「厨子甕」展	博 物 館
9. 1～ 9. 26	民 具 資 料 展	ヤチムン会・博物館
10. 1～10. 17	洋 画 四 人 展	エンブリオ会
10. 27～11. 7	「写真に見る戦前の沖縄」展	博 物 館
11. 12～11. 21	赤 土 展	赤 土 会
12. 1～12. 12	旺 玄 展	沖縄旺玄会
12. 15～12. 23	絵 画 展	琉大美工科「群」

※ 「日本古美術展」は第1.2陳列室の他ロビーも使用

3. ロビー

月 日	使 用 目 的	使 用 者 名
1971. 1. 10～ 3. 15	当館所蔵「香炉」展	博 物 館
1971. 10. 5～1972. 2. 3	当館所蔵「パナリ焼」展	〃
1971. 12. 1～12. 7	文 化 財 写 真 展	文保委・博物館

入 館 者 数

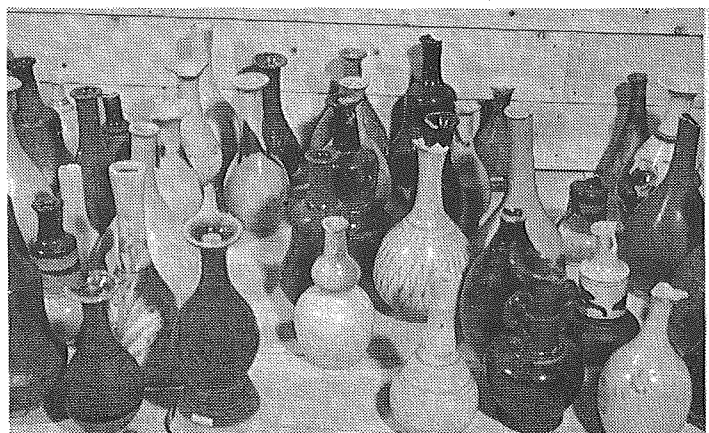
1. 参観者統計 (1962年~1971年)

年 別	人 数	備 考
1962 年	119,437	
1963 年	119,281	
1964 年	150,935	
1965 年	89,593	
1966 年	135,386	11 月新館開館
1967 年	229,464	「日本古美術展」開催
1968 年	97,062	
1969 年	100,110	
1970 年	100,238	
1971 年	268,524	「日本古美術展」開催
計	1,410,030	

2. 月別参観者 (1971年1月~12月)

月	項 目	大 人	学 生	生 徒	計	開館日数	1日平均	備 考
1		3,864	325	869	5,058	23	215	
2		5,278	357	1,173	6,808	23	296	
3		42,373	5,706	7,013	55,092	24	1,777	日本古美術展
4		111,070	5,246	5,926	122,242	23	5,315	" " "
5		3,406	149	3,248	6,803	23	299	
6		3,913	743	1,496	6,152	25	246	
7		3,855	1,081	1,219	6,155	27	288	
8		4,799	2,320	1,513	8,632	26	332	
9		2,862	340	722	3,924	23	171	
10		4,937	348	5,773	11,058	26	425	
11		6,787	1,330	9,372	17,489	21	833	
12		17,142	387	1,582	19,111	23	831	
計		210,286	18,332	39,906	268,524	24	919	

主なる新収蔵品写真



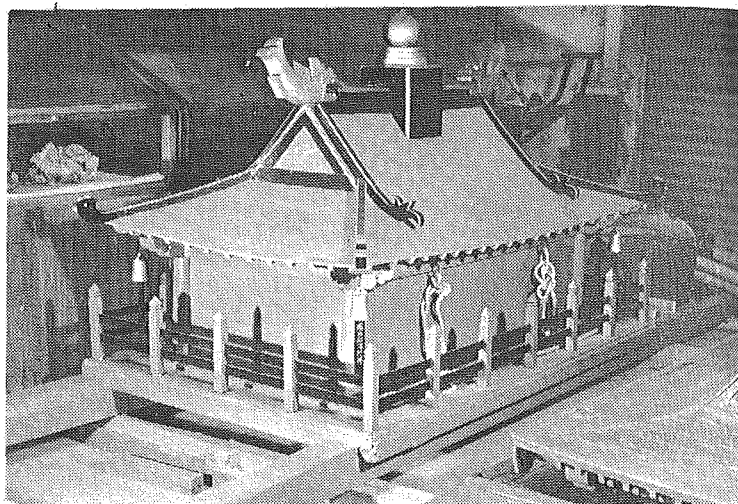
八重山古墳出土陶磁の一部



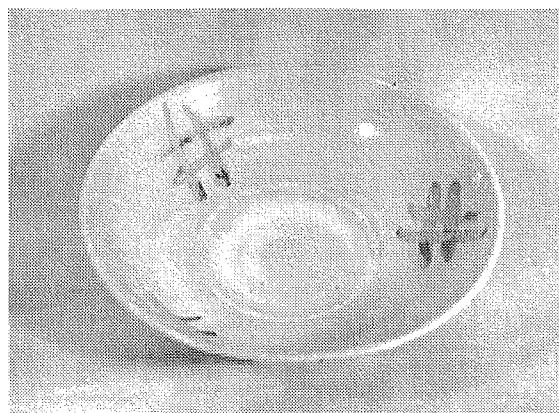
釘彫草花文花生



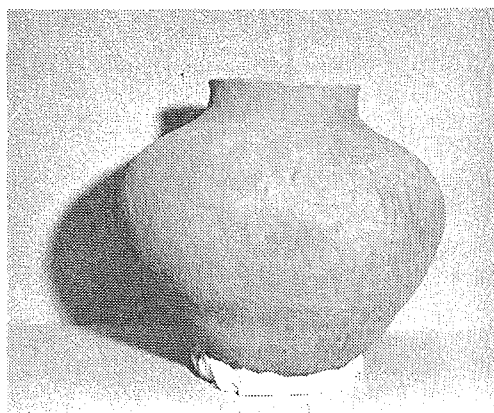
古我知焼壺形厨子甕



龕



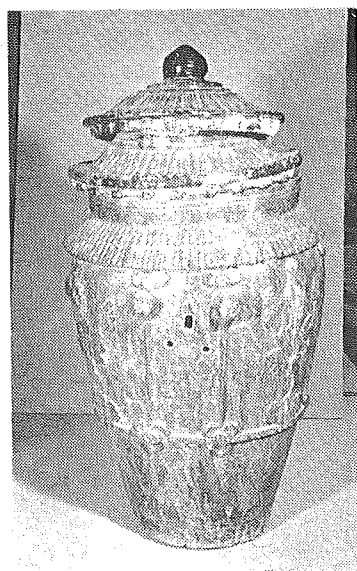
灰釉中皿



土器壺



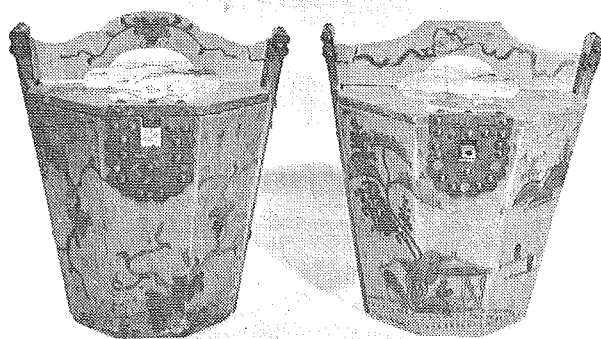
古我知焼壺形厨子甕



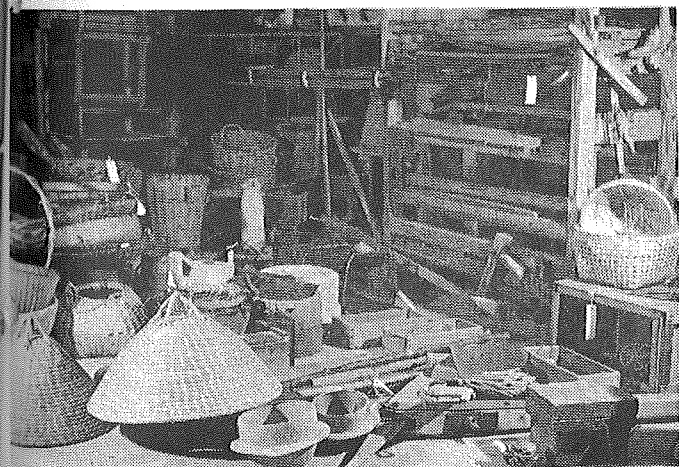
古我知焼壺形厨子甕



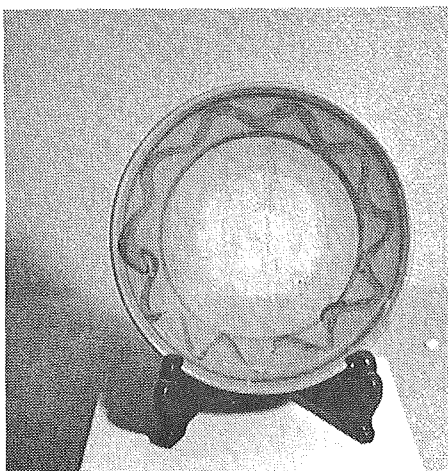
パナリ焼大壺



朱塗堆錦タークー(左) 朱塗泊絵タークー(右)



収集した民具の一部



灰釉中皿

新 収 蔵 資 料

購 入 の 部

1971. 1. ~ 12. 31

分 類	名 称	数 量	備 考
民 俗	ふ く ろ 網	1	糸 満 市 より
"	立 網	1	"
"	ギ ソ ウ 網	1	"
"	油 鍋	1	"
"	石 う す	1	"
"	シ ン メ ー 鍋	2	"
"	チ ル ガ キ 鍋	1	"
"	ハ ガ マ	1	"
"	ム チ ア ガ ラ サ ー	1	"
"	ユ イ	1	"
"	カ タ ッ パ ー フ ジ ョ ウ	1	"
"	ユ ー ト ウ イ	1	"
"	丸 フ ジ ョ ウ	1	"
"	ジ ン デ イ ー ル	1	"
"	ク バ ガ サ	1	"
"	シ ン タ	1	"
"	ユ ナ バ ー キ	1	"
"	キ ン バ ー キ	1	"
"	サ バ ニ の 帆	1	"
"	麦 わ ら 笠	1	"
"	石 う す	3	"
"	茶 わ ん バ ー キ	1	"
"	チ ー ト ウ ヤ ー	1	"
"	ム チ ア ガ ラ サ ー	2	"
"	ユ イ	2	"
"	ウ ー シ グ ワ ー	1	"
"	シ ン タ	1	"
"	ス キ	1	"
"	モ リ	1	"

民 俗	サ バ ガ タ ナ	2	糸 満 市 より
"	タ マ ウ ー キ	1	"
"	製 筵 機	2	"
"	古我地焼壺型厨子ガメ	1	今 帰 仁 村 より
"	ス ル ア ミ	1	本 部 町 より
"	ウ チ ア ミ	1	"
"	ス ル ・ ン ヌ	1	"
"	ユ ー ト イ	1	"
"	古我地焼壺型厨子ガメ	1	今 帰 仁 村 より
"	"	1	"
陶 磁 器	ト ビ カ ン ナ 塩 壺	1	糸 満 市 より
"	染 付 徳 利	1	"
"	水 ガ メ	1	"
"	壺	3	"
"	小 壺	2	"
"	チ ュ ワ カ シ	1	"
"	ハ ン ド ウ 甕	1	"
"	白 地 染 付 香 炉	1	宜 野 湾 市 より
"	パ ナ リ 焼 大 ガ メ	1	"
"	土 器 大 ガ メ	1	"
"	染 付 花 生 (筒 型)	1	"
"	灰 釉 中 皿	1	"
漆 器	朱 塗 蒔 絵 タ ー ク ー	2	"

寄 贈 の 部

分 類	名 称	数 量	寄 贈 者 名 (敬称略)
民 俗	煙 管 雁 首 (陶 製)	1	石 垣 市 屋 比 久 正 勝
"	テ ィ ー ル グ ワ ー	1	糸 満 市 上 原 誠 章
"	チ ー バ コ	1	" " "
"	エ ビ イ ケ ス	1	" 上 原 誠 一
"	ア グ イ	1	" " "
"	ア ギ タ	1	" " "
"	茶 わ ん バ ー キ	1	" 小 波 津 朝 芳
"	サギディール (ふたつき)	1	" 金 城 亀 太 郎
"	イ ー ワ ヤ ー	1	" 大 城 長 盛
"	イ ー ワ ヤ ー	1	" " "

民 俗	セ	一	マ	一	1	糸 満 市	大	城	長	盛
"	金	ア	ラ	ク	1	"	"	"	"	"
"	馬	の	鞍	(スキ鞍)	1	"	城	島	豊	正
"	す			き	1	"	"	"	"	"
"	す	き	用	の 引具 (棒)	1	"	"	"	"	"
"	ク			ギ	1	"	"	"	"	"
"	お	も	が	い	1	"	新	垣	輝	昌
"	ハ		ガ	マ	1	"	伊	敷	亀	順
"	ク	ル	マ	ボ	一	"	"	"	"	"
"	ソ	一	キ	グ	ワ	一	"	"	"	"
"	テ	イ	ル	ル	1	"	"	"	"	"
"	ト	ウ	ザ	(両 端)	1	"	新	垣	万	八
"	平		ぜ	ん	1	"	新	垣	昭	徳
"	ハ	ガ	マ	(小)	1	"	"	"	"	"
"	ほ	う	き	(ソテツ)	1	"	"	"	"	"
"	ガ	ン	シ	ナ	1	"	"	"	"	"
"	イ	ビ	ラ	(大) 御 飯 用	1	"	伊	敷	亀	助
"	ユ	ナ	バ	一	キ	1	"	"	"	"
"	ム	チ	ン	ブ	サ	一	"	"	"	"
"	イ	ザ	イ	ラ	ン	ブ	1	伊	敷	幸
"	フ	タ	デ	イ	一	ル	1	金	城	良
"	ク	ル	マ	棒	1	"	金	城	ト	ミ
"	ガ	ン	シ	ナ	1	"	"	"	"	"
"	セ	一	マ	一	1	"	"	"	"	"
"	ア	ン	ダ	ナ	一	ビ	1	金	城	万
"	豆		腐		箱	1	"	玉	城	テ
"	"		"		1	"	"	"	"	"
"	"		"		1	"	"	"	"	"
"	マ	ナ	チ	ヤ	1	名 護 市	新	里		薫
"	バ			ラ	1	"	"	"	"	"
"	ユ			イ	1	"	"	"	"	"
"	ソ		一	キ	1	"	"	"	"	"
"	ソ		一	キ	1	"	"	"	"	"
"	タ	カ	ウ	ジ	ン	1	"	"	"	"
"	ア	ラ	ユ	イ	1	"	金	城	辰	幸
"	パ			ラ	1	"	"	"	"	"
"	ミ	チ	マ	タ	1	本 部 町	仲	村	渠	蒲
"	テ	一	ジ	一	キ	グ	比	嘉	知	喜

民 俗	ソ	一	キ	1	本部町	比	嘉	知	喜
"	シ	オ	メ	ガ	ネ	"	玉	城	長
"		枕			1	鹿兒島県	与		友千代
"		"			1	"	上	田	福
"	は	え	た	た	き	"	栄	元	為
"	縄	打	ち	棒	1	"	官	当	鶴
"	テ	イ	ヌ	キ	ア	ミ	"	溯	辺
"	ワ	ラ	グ	チ	1	"	和	泊	町
"	ワ	ラ	ツ	ト	1	"	"	"	"
"	古	我	知	焼	厨	子	宜野湾市	石	川
"	カ	ク	ラ	ン	プ	1	南風原村	普	天
"	ウ				ス	1	伊平屋村	野	甫
"	パ	ナ	マ	帽	の	木	北谷村	漢	那
陶 器	縄	目	文	甕	1	西原村	平	良	専
"	ワ	ン	ブ	一	1	那覇市	瑞	慶	覧
"	茶		わ	ん	1	糸満市	大	城	長
"	チ	ユ	一	カ	一	"	金	城	棋
"	ア	ン	ダ	ガ	ー	ミ	"	伊	敷
"	カ		一	ミ	1	本部町	仲	村	渠
"	南	蛮	大	甕	1	那覇市	新	城	德
"	土		器	壺	1	宜野湾市	石	川	盛
"	ワ	ン	ブ	一	1	"	"	"	"
"	塩			壺	1	南風原村	新	垣	安
装身具	ジ	一	フ	ァ	一	那覇市	瑞	慶	覧
"	カ	ミ	サ	シ	(かんざし)	1	糸満市	城	島
貨 幣	鳩		目	銭	1		ヤ	チ	ム
"	古			銭	28	糸満市	城	島	豊
考 古	石			斧	1	那覇市	島	袋	広
漆 器	朱	塗	山	水	絵	堆	錦	湯	庫
歴 史	東	南	ア	ジ	ア	地	図	1	
"	日	本		地	図	1	京都	中	川
金 工	燈	籠	型	風	鈴	1	中城村	井	口
民 俗	テ	イ	一	ル	1	糸満市	上	原	弘
"	オ	一	ラ	一	1	伊平屋村	末	吉	初
"	テ	イ	一	ル	1	"	"	"	仁
"	ウ	ル	ワ	イ	チ	ズ	カ	1	
"	チ		ズ	カ	1	"	野	甫	益
						"	仲	川	盛
									蒲

新 収 蔵 図 書

購 入 の 部

(1971年1月～12月)

書 名	数 量	書 名	数 量
徳 之 島 町 誌	1 冊	那 覇 今 昔 の 焦 点	1 冊
八 重 山 古 謡	1 冊	古 美 術 品 保 存 の 知 識	1 冊
名 護 市 の 今 昔	1 冊	天 然 記 念 物 事 典	1 冊
那 覇 の 今 昔	1 冊		

寄 贈 の 部

書 名	部数	寄 贈 名	書 名	部数	寄 贈 名
扇	1	吉 野 裕 子	MUSEUM ^{1970 71} _{11~12 1~12}	14	東京国立博物館
琉球大学創立20周年記念誌 1970	1	琉 球 大 学	日 本 美 術 工 芸	1	日本美術工芸社
那覇市史 第2巻中の3	1	那 覇 市 役 所	民 俗 文 化		滋賀民俗学会
フ ォ ー ト	12	時 事 通 信 社	日 本 時 代 風 俗 写 真 図 録	1	児 玉 梅 次 郎
研 究 余 滴 139～185	46	球 陽 研 究 会	沖 縄 文 化 史	1	阿 波 根 朝 松
博物館ニュース 1～11	10	日 本 博 物 館 協 会	枯 山 水 の 庭	1	福 田 和 彦
ニュース ^{70 71} _{12月号 1～8}	9	国 立 科 学 博 物 館	日 本 の 旅 17 沖 縄	1	山 田 書 院
電 信 電 話 要 覧	1	琉球電信電話公社	琉 球 の 陶 器	1	琉球電信電話公社
日本および東アジア発見の馬歯馬骨	1	日 本 中 央 競 馬 会	能本史学 第37号 38号	2	
沖縄民俗同好会報 16号～19号	2	沖 縄 民 俗 同 好 会	キ リ シ タ ン の 歩 み	1	大阪市立博物館
府中市史近代編資料集15	1	東 京 都 府 中 市	大 阪 の 神 社 の 名 宝	1	"
琉球絃と紅型	1	岡 村 吉 右 衛 門	大 阪 市 立 博 物 館 No.10	2	"
日本の旅 15 沖縄・日本の島	1	座 右 宝 刊 行 会	揮 毫 解 説 集	1	佐 久 本 興 吉
博物館学紀要第2輯	1	国 学 院 大 学	安 倍 寛 次 寄 贈 資 料 目 録	1	釧路市立郷土博物館
町 制 20 周 年 記 念 誌	1	宮 古 下 地 町 役 所	釧路市立郷土博物館々報 200～212	13	"
沖 縄 の 歴 史	2	月 刊 沖 縄 社	市立旭川郷土博物館月報 1～9	9	"
原野農芸博物館図録 第1集・第2集	2	原 野 農 芸 博 物 館	民 俗 文 化 90～97	8	滋賀民俗学会
博物館研究 第43 第44	2	日 本 博 物 館 協 会	研 究 業 績 No. 2	1	熱川バナナワニ園 研究所
金 刀 比 羅 宮	1	大 阪 市 立 博 物 館 平 山 氏 より	月 刊 琉 球 放 送		R B C
旭川郷土博物館研究報告 6号	1	市立旭川郷土博物館	研究余滴 第2集 第3集	1	嘉手納 宗 徳

円覚寺総門復原工事報告書	1	琉球政府文化財保護委員会	岡山民俗会報 63号・65号・67号	3	岡山民俗
長崎市立博物館々報11号	1	長崎市立博物館	みんなの博物館 第2号 第3号	2	山口県立博物館協会
沖縄歴史研究9号	1	沖縄歴史研究会	琵琶湖文化館だよりNo.12	1	
近江の甲冑と武具	1		万国博美術館における展示環境の調査と保存対策	1	日本万国博覧会協会万国博美術館
衣生活 1971 2月号 花織をたずねて	3	今津玲子	自然科学と博物館 5~10	5	国立科学博物館
教育年報 No. 7	1	琉球政府文教局	文化庁月報 第33~36 45号・46号	6	文化庁
アート 18の3	1	中川伊作	商工季報 1. 2	1	那覇商工会議所
社会教育の現況 70年度	1	琉球政府文教局社会教育課	オキナワグラフ 3月号 5. 9月号	3	オキナワグラフ社
学校基本調査報告書	1	琉球政府文教局調査計画課	モンキー	1	日本モンキーセンター
徳之島採集手帖12~17号	6	徳之島郷土研究会	少年非行の実態	1	琉球警察本部
博物館だより 70 71 No.5~6 1~3	5	神奈川県立博物館	八重山民謡三味線工工四上下巻	1	大浜安伴
秘宝大徳寺	1	講談社	ふなひき太郎	1	儀間比呂志
伊場遺跡第3次発掘調査概報	1	浜松市教育委員会	沖縄関係雑誌記事索引	1	琉球政府立法院図書館
浜松市半田山古墳群(B群)調査記録Ⅱ	2	"	南島研究 12号	1	南島研究会
三浦半島の民俗	1	神奈川県立博物館	鹿児島民俗 12号	1	鹿児島民俗学会
民俗学評論第5号	1	大塚民俗学会	武威野美術大学美術資料図書 1号~2号	2	"
佐賀県立博物館々報 1~4	1	"	富士山	1	富士山ビジターセンター
佐賀県立博物館年報	1	"	民俗学評論第6号	1	大塚民俗学会
市制50周年記念歴史民俗資料展	10	那覇市役所	聖教グラフ(5-18)合併号	1	聖教新聞社
第18回全国博物館大会報告書	1		倭成園通信 27・28・33号	3	
第3回学芸職員研究集会報告書	1	日本博物館協会	MYSTÈRES	1	中川伊作
京都国立博物館年報44年度	1	京都国立博物館	東京国立博物館紀要6号	1	東京国立博物館
研究紀要 第6集	2	小松市立博物館	行政管理関係法令集	1	琉球政府総務局
近畿民俗 No. 53	1	近畿民俗学会	教育財政調査報告書	1	" 文教局
陳情続けて20余年	1	仲吉良光	地方教育行政調査	1	" "
和泊町の文化財	1	中央公民館	第3回学校設備調査報告書 1969学年度	1	" "
知名町指定文化財	1	知名町中央公民館	青い海 5. 6. 9. 10. 11. 12月号	6	おきなわ出版社
観光沖縄 157~158	2		加曾利貝塚	2	千葉教育委員会
文部省史料館報 12~14	3		宮崎県立博物館々報17号	1	宮崎県立博物館
岡山民俗 91~95	5	岡山民俗	日本博物館協会会員名簿	1	日本博物館協会

包遵彭先生記念論文集	1	国立中央図書館	カラー 沖縄の歴史	1	月刊 沖縄 社
沖縄の教育風土記	1	養秀同窓会	無形文化財要覧 46年版	1	芸 艸 堂
山崎コレクション目録	1	群馬県立博物館	大宰府・大宰府天満宮史料巻7	1	大 宰 府 天 満 宮
ヤチムン会誌第2号	3	ヤチムン会	大阪府文化財総合目録	2	大阪市立博物館
トカラ列島有形民俗資料調査報告	1	鹿児島県明治百年記念館建設調査室	古代文化 23巻	2	古代学協会
博物博の教育活動	1	日本博物館協会	桃山江戸美術名作展	1	佐賀県立博物館
第10回那覇市統計書	1	那覇市役所	明治100年記念展	1	"
史料館所蔵民族資料図版目録第4	1	文部省史料館	正倉院展目録	1	奈良国立博物館
竹 富 町 誌	1	山城善三	螺鈿<片岡華江>	1	文 化 庁
19~21年版			色絵磁器(宮本憲吉)	1	"
日本美術年鑑22~26 "	3	国立科学博物館	社会教育調査速報	1	文 部 省
27~29 "			明治村通信 15~20	1	明 治 村
琉 歌 百 選	1	琉球政府文教局社会教育課	東京芸術大学芸術資料館年報	1	東京芸大芸術資料館
国立近代美術館年報 S 37年	1	"	友の会々報 No.10 No.13	1	市立函館博物館
日本古美術展 1966年	1	旭川市教育委員会	SARANIP No.3	1	"
旭川市の文化財	1	市立旭川郷土博物館	古 墳 文 化	2	大阪市立博物館
市立旭川郷土博物館所蔵品目録	1	美術研究社	郷土と科学 17巻1号	1	国立科学博物館
日本美術年鑑	1	大城精徳	安土桃山時代の文化	1	滋賀県立琵琶湖文化館
琉球の屋根獅子	1	京急油壺マリナー	人民中国 1971年10月号	1	日本中国友好協会 沖縄県本部
京急油壺マリナー水族館年報	1	横須賀市立博物館	花織・花染 第1号・第2号	2	首里高等学校
横須賀市博物館研究報告 第15号・17号	2	"	SUPPLEMENT TO DIRELTORY OF ASIAN PALIEK MUSEUMS	1	BISHOP MUSEUM
横須賀市博物館研究雑報 第16号	1	用と美の会	群馬県立博物館報 13号	1	群馬県立博物館
季刊 用と美 No.1 No.2	2	京都書院	丹波一國史と民俗-4号	1	丹波民俗研究会
美と工芸 169	1	那覇市役所	市立旭川郷土博物館研究報告第7号	1	市立旭川郷土博物館
市政早わかり 171	1	京都工芸染匠協同組合	カラフト・アイヌ展目録	1	市立函館博物館
薫 染 九	1	名渡山 愛 拓	美術品輸送	3	日本通運
琉球新報縮刷版 1月	1	琉球政府総ム局	目黒寄生虫館研究報告第5号	1	目黒寄生虫館
昭和46年10月国会提出法案	1	"	琉 球 電 々 No.1	1	琉球電信電話局
沖縄経済の現状 1970	1	日本経済教育センター	市 政 50 周 年	1	那 那 市 役 所
沖縄の要覧 S 45年	1	日本経済教育センター			
復帰記念沖縄特別国民体育大会準備概要	1	国学院大学博物館学講座			
博物館学紀要第3輯	1				

博物館主催行事

1. 当館所蔵書跡及び関帝王展

期間：1971年2月13日～2月28日

場所：第2陳列室

当館所蔵の絵画、書跡の中から、これまであまり公開されたことのない中国人の書や楽童子の書、それに関帝王などを選び展示したものである。

楽童子とは、慶賀使として江戸上りの一行に加わった6人の少年達を指す。年齢は14才から16才までで、少年達は女装をして、歌舞音曲に秀れていることを第一条件としている。

展 示 品

また、関帝とは関羽の敬称で、昔から沖縄でも「クワンティーオー」として愛称されてきた。人々の信仰的になっていた関帝王は、かなり絵に描かれてきたようである。

出 品 内 容

番号	名 称	寸 法	番号	名 称	寸 法
1	関 帝 王 呉著仁筆	126.0 × 58.6	13	伝渡嘉敷兼副書	
2	” 比嘉華山筆	125.3 × 49.3	14	鄭嘉訓書(2)	
3	” 作者不詳	113.5 × 70.0	15	魏学賢書(2)	
4	” 作者不詳	91.5 × 46.5	16	林則徐書	
5	” 馬元欽筆	77.0 × 93.5	17	魏学賢書(3)	
6	関 羽 図 作者不詳	240.0 × 132.0	18	向元模書	
7	時茂書		19	楽童子毛徳昌書	
8	魏学賢書(1)		20	魏学賢書(4)	
9	林鴻年書		21	徐葆光書(1)	
10	尚育王書		22	” (2)	
11	楽童子の書		23	鄭嘉訓書(3)	
12	鄭嘉訓書(1)		24	浦添王子朝熹書	

2. 日本古美術展—くらしの中の美—

主催：サントリー美術館・琉球政府立博物館

期間：1971年3月20日～4月18日

会場：第1.2陳列室及びロビー、講堂

復帰を目前にひかえて、県民に日本の伝統文化を理解させ、その真髄にふれさせたいという当館の強い要望により、サントリー美術館の厚意を得て、同美術館所蔵品の中から約170点が出品された。また日本風俗史学会の協力も得て、等身大の人形による風俗の変遷を展示した。毎日開館し、多い時で1日2万3千余の入館者でにぎわい総計16万9千



第1陳列室風景

6百余をかぞえ、当館開館以来の盛況を呈した。

<経過>

- 1970年12月末 「日本古美術展—くらしの中の美—」の開催が本決まりする。
- 1971年1月12日 開催打合せのためサントリー美術館長代理平井鮮一氏、同事務局長山口久吉氏ら来館。
- 1月14日 琉球東急ホテルにおいて、「日本古美術展」の開催記者発表会、並びに披露パーティーを催す。
- 2月17日～3月5日 ポスター発送並びに展観の趣旨説明のため学校めぐり。(本島内の約300校)
- 2月16日～21日 「日本古美術写真展」を那覇市内沖縄三越催場で開催。引続き24日～3月2日は名護琉米文化会館、3月5日～6日は宮古琉米文化会館、3月9日～10日は八重山琉米文化会館にて開催し、「日本古美術展」へ向けて情宣する。
- 3月9日 古美術品、パトカーの先導により搬入
- 3月16日～18日 開棚並びに陳列作業。
- 3月19日 オープニング・レセプション(参会者約200人)
- 3月20日 「日本古美術展」始まる。
- 3月27日 <文化講演会>
山里永吉氏 「古美術を中心とした琉球文化史」
和歌森太郎氏 「沖縄文化の特質と日本文化史」
- 4月3日 美術教師特別鑑賞会を展示会場にて催す。
(講師：鎌倉芳太郎氏、参加者約100名)

4月 3日 <文化講演会>

阿波根朝松氏「沖縄文化の源流をたずねて」
鎌倉芳太郎氏「日本古美術史概観」

4月 5日 日本古美術展見学感想
作文を募集することを
決め、文教局指導主事
の与儀利夫氏ら10氏に
審査を委嘱し、その第
1回打合せを開く。

4月17日 サントリー美術館より
当館へ樹花木の寄贈目
録の贈呈があり、記念

植樹式を行なう。金井喜久子女史作詞作曲の「梯梧の花」の発表会も同時に行なう。

4月18日 「日本古美術展」最終日。ホールにおいて4時50分より閉会式。当日の参観者2万3千7百余。総計16万9千6百余。

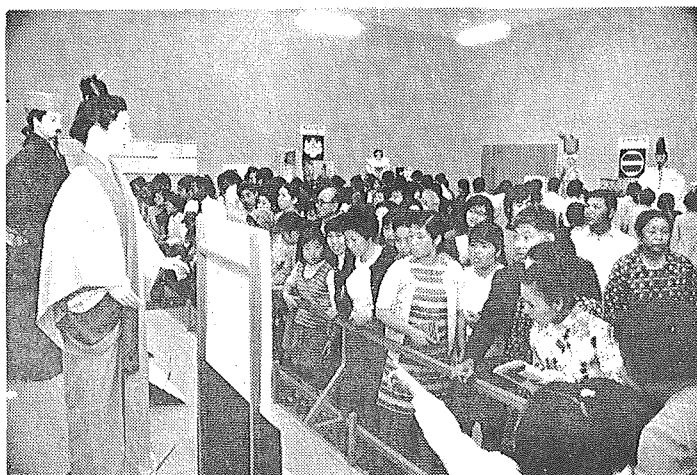
4月19日～22日 古美術品梱包作業。

4月26日 古美術品を当館より搬出。翌27日東京丸にて出港。

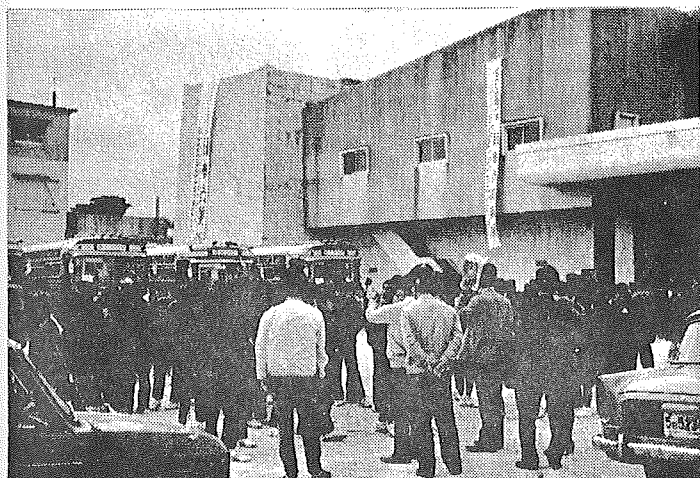
4月25日 八汐荘にて感想文の審査会。最優秀賞3、優秀賞14、入選48を選定す。

5月 8日 感想文コンクール表彰式、その後資料室にて受賞者の懇親会をもつ。(最優秀賞3人は、引率の奥浜春子先生と共に8月5日～9日の5日間京都見学に招待することになった。)

※ その他 講堂では毎日、古美術展に関する映写をし、会期の前半は「白拍子の舞」、後半は「花下遊樂の舞」を公開し、人気を博す。



第2陳列室風景



学校団体見学者

<出品目録>

国宝	浮線綾蒔絵螺鈿手箱	鎌倉時代
重文	小倉山蒔絵硯箱	室町時代
重文	桐竹鳳凰蒔絵文台と硯箱	桃山時代
重美	秋草図屏風	江戸時代
重美	尾形光琳筆	江戸時代
重美	舞踊図	〃
重美	善教房絵詞	鎌倉時代
重美	秋草蒔絵鏡台	桃山時代
重美	寿老色絵大皿(柿右衛門)	江戸時代
	鼠草紙	(室町時代)
	洛中洛外図屏風	(江戸時代)
	武蔵野図屏風	(江戸時代)

祇園山王祭礼図屏風
 (江戸時代)、職人尽
 図屏風(江戸時代)、
 遊楽図(桃山時代)、具
 足(伝豊臣秀次所用一
 桃山時代)、貝合せ具
 (江戸時代)、その他
 漆器、陶磁器、能装束
 小袖等合計 170 点余。



記念植樹式

<入館者数>

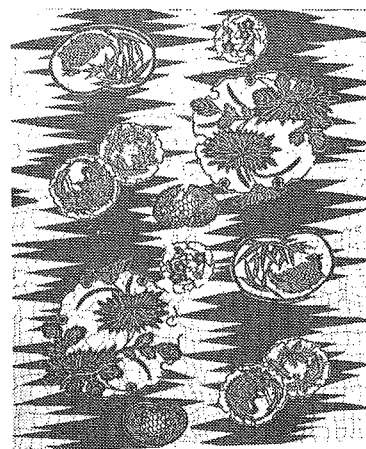
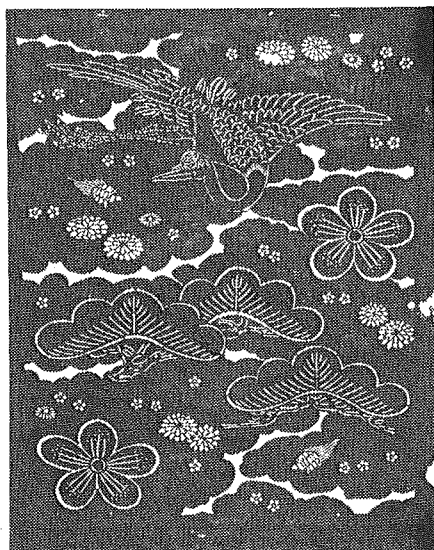
月 日	入館者数	備 考	月 日	入館者数	備 考
3. 20 (土)	5,699		4 (日)	8,262	
21 (日)	7,703		5 (月)	3,018	
22 (月)	6,233		6 (火)	2,203	
23 (火)	4,199		7 (水)	2,106	
24 (水)	2,609		8 (木)	1,550	
25 (木)	2,990		9 (金)	2,834	
26 (金)	3,334		10 (土)	2,427	
27 (土)	3,011		11 (日)	10,450	
28 (日)	5,744		12 (月)	4,126	
29 (月)	2,440		13 (火)	10,477	
30 (火)	3,898		14 (水)	8,293	
31 (水)	2,471		15 (木)		4. 15ストのため閉館
4. 1 (木)	5,330		16 (金)	12,431	
2 (金)	3,787		17 (土)	13,375	
3 (土)	5,032		18 (日)	23,723	

3. 当館所蔵紅型型紙展

期間：1971年5月1日～5月25日

場所：第2陳列室

紅型々紙には、染地用と白地用とがある。紙は渋紙を用い、ルクシューと称する乾燥豆腐の上で型彫りをする。その際、一気に切りとることをせず、刀は常に小刻に運用して押し切る。模様も多種多様で、しかも大、中、小、変化に富み、会場につめかけた染織関係者や研究家などから人気があった。



型紙の一例

今回、展示された型紙の殆んどが初公開であり、また、型紙それ自体が立派なデザインで展示効果の点でも一般からの受けはよかった。

出品目録

番号	名称	寸法	番号	名称	寸法
1	菊水模様紅型々紙	タテ ヨコ 54.2×40.0	15	車輪に草花模様紅型々紙	タテ ヨコ 15.3×41.2
2	花鳥模様 "	54.0×40.4	16	ススキに草花模様 "	35.8×42.8
3	鳳凰に花模様 "	53.7×40.0	17	草葉模様 "	23.0×41.0
4	鶴に松竹梅模様紅型々紙	54.0×40.0	18	幾何模様 "	21.5×41.8
5	扇に菊水模様 "	54.0×40.0	19	草葉模様 "	18.8×42.8
6	貝、波に千鳥模様 "	35.0×40.0	20	波に魚模様 "	27.9×42.0
7	菊水、鷺鳥模様 "	54.5×40.0	21	幾何模様 "	19.0×42.6
8	藤花模様 "	46.8×40.0	22	草花模様 "	18.4×42.6
9	丸に草花模様 "	54.0×40.0	23	波に小鳥模様 "	18.5×42.1
10	草花模様 "	54.0×40.0	24	輪模様 "	19.5×40.5
11	草花に舟模様 "	35.0×40.0	25	幾何模様 "	19.2×42.9
12	松竹梅に鶴亀模様 "	54.0×40.0	26	波に鯉模様 "	20.8×41.0
13	垣根に花模様 "	19.0×42.2	27	更紗模様 "	14.4×43.0
14	鶴に鷺鳥模様 "	18.7×43.0		その他 80 枚	

4. 当館所蔵厨子甕展



展示準備風景



出品物の一部

近年では、もっぱら美術価値的な面に目が向けられ、それに伴って、各地で高値で取引きされるようになった。当館は陶製石製をとわず、それらを民俗資料の中に入れていく。ジレッタニズム的なものとしてではなく、もっと広い立場から琉球文化を理解していきたいからである。

出品目録

○ 石 厨 子	1936 年	○ 素焼御殿型厨子甕	18 世紀中期
○ 石 厨 子	1688 年	○ " "	19 世紀初期
○ 石 厨 子	年代不詳	○ 上焼御殿型厨子甕	1846 年
○ 石 厨 子	"	○ " "	1856 年
○ 素 焼 壺	"	○ " "	1868 年
○ "	"	○ " "	1897 年
○ パナリ焼壺	"	○ " "	1928 年
○ 素焼御殿型厨子甕	1776 年	○ " "	1935 年
○ "	"	○ 彩色石厨子	19 世紀中期

その他、45点を展示した。今回は、北中城村字和仁屋から龕の寄贈もあり、一段と展示効果をあげることができた。

期間：1971年6月11日～8月25日

場所：第2陳列室

1969年3月12日～4月27日の「厨子甕展」に引続いて第2回目の展示である。今回は60余点を展示した。

厨子甕は、洗骨したお骨を納め、安置するもので、石製と陶製がある。石製厨子には石灰岩、閃緑岩、凝灰岩製などがある。身分により用材も異なるが、サンゴ石灰岩の俗にメカル石といわれるものは、庶民の間でも広く用いられたようで、特に津堅、平安座、中城村など中城湾、金武湾に面した一帯では近年までよく用いられたようである。

陶製の厨子甕は形や釉薬が多様多様である。発生的には丸型の壺が古く、御殿をかたどったウドゥン厨子は18世紀あたりから盛んに作られたしている。初期のころは釉薬もなく、素焼であるが、時代が下るにつれて装飾が多くなり、色彩も豊かになっている。羽地の古我知焼、八重山のバナリ焼など、素朴なものである。

5. 民 具 資 料 展

— ヤ チ ム ン 会 と の 共 催 に よ る —

期間：1971年9月1日～9月26日

場所：第2陳列室

ヤチムン会員所蔵の民具500

余点を一堂に集め、「民具資料展」として一般に展示公開したものである。当館とヤチムン会は前回の「やきもの資料展」に引き続いて、今回の「民具資料展」という形で行なわれることになった。

出品物は本島は勿論、各離島から集めたもので衣、食、住、農具、漁具などをはじめバラエティーに富み、展示方法も漸新で評判がよかった。最近の民具ブームもあって、会場ではつめかけた子供や老人まで、共通の話題で終始和やかな雰囲気包まれ賑わった。



展 示 品

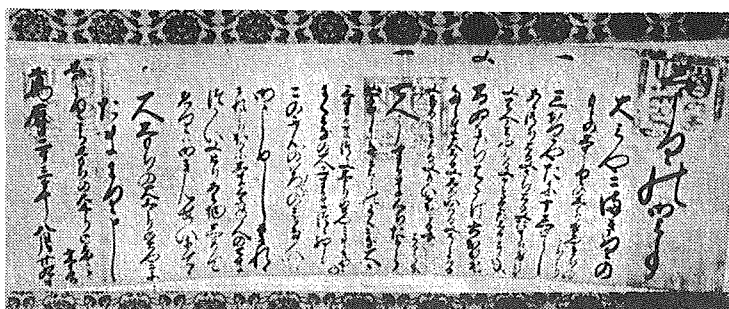
出 品 内 容

- (衣) 芭蕉布着物、読谷山花織着物、読谷山花織手布、クルジナー（労働着）、琉球絣着物、みのクバガサなど。
- (食) 豆腐箱、カマンタ（鍋のふた）、フタバキ、サギゾーキ、平バーキ、フジョウ、ウブル（クバのつるべ）、石臼、トーフウキなど。
- (住) 自在かぎ、たばこ盆、マージ、ほうき（ソテツ、ススキ）、ニクブク（敷物）、タンス、箆アジマツクワなど
- (農業) ウザイ、ヘラ、ティビク、アサンザニ、クルマ棒、ウーシ（臼）、アジン（杵）、シリウーシ（摺臼）、磨石、イラナ（鎌）、オーダー、クミウーキ（米桶）など。
- (漁業) ユートウイ、トウジャ、海フジョウ、スル網、投アミ、ウエーク、ウミ箱など。
- (祭具) 仏壇、厨子甕、香炉、花生、四流旗、幕、六地藏など。

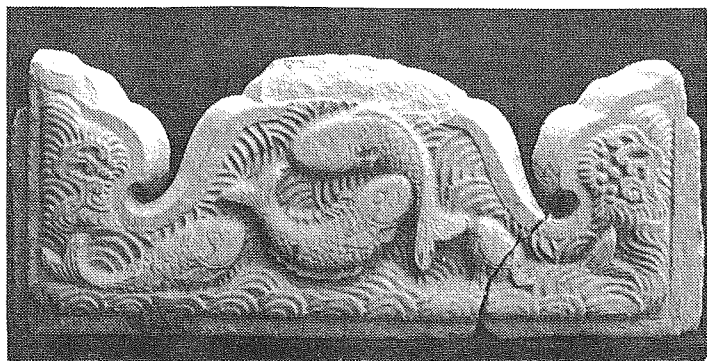
6. 当館所蔵指定文化財展

期間：1971年12月1日～12月7日

場所：第一陳列室、ロビー



重文 宮古島下地の首里大屋子への辞令書



特重文 世持橋勾欄羽目

例年、11月1日から一週間開かれている文化財保護強調週間が都合により、今年は一ヶ月遅れ、12月1日から一週間開催された。

今年は各地に於ける民俗芸能の公開、記念切手の発行などと平行して、博物館第一陳列室においては、当館所蔵指定文化財展、文化財写真展（ロビー）、民俗芸能映写会（ホール）などが行なわれた。

出品内容

番号	名称	種別	番号	名称	種別
1	木彫円覚寺白象並びに趣意書木札	特別重要文化財	8	黒塗螺鈿雲竜文内金箔蓋付椀	重要文化財
2	世持橋勾欄羽目	〃	9	三味線「江戸与那」	〃
3	玉陵石彫獅子	重要文化財	10	評定所格護定本おもろさうし	特別重要文化財
4	旧首里城正殿前梵鐘	〃	11	評定所格護定本混効験集	〃
5	聞得大君御殿雲竜黄金簪	〃	12	評定所格護中山世鑑	重要文化財
6	黒塗螺鈿遊雁絵大文庫	〃	13	評定所格護中山世譜	〃
7	黒絵堆錦山水絵大文庫	〃	14	宮古島下地の首里大屋子への辞令書	〃

7. 当館所蔵「パナリ焼」展

期間：1971年10月5日～1972年2月3日

場所：ロビー

パナリ焼とは、八重山の新城島で焼かれた素朴な土器のことである。新城島は上^{かみ}地と下^{しも}地の二つの島からなり「^{パナ}離り」と称されている。

パナリ焼の歴史は明らかでなく、その上限を知ることはい出来ないが、記録によると1857年（114年前）までは、焼かれていたようである。焼成方法は地上でカヤヤススキなどをかぶせて焼く方法といわれ、その製品は、鍋、釜、水甕、タライ、壺、香炉、花活産炉など、いろいろのものが作られ、それらは八重山中で使用されていた。



今回は当館所蔵のパナリ焼各種を展示したものである。

出 品 内 容

番号	名 称	寸 法	番号	名 称	寸 法
1	急 須		14	蓋	経
2	火 取		15	鉢	22.0
3	壺		16	壺	高 さ
4	取手付火取		17	〃	5.0
5	壺	21.5	18	〃	24.0
6	〃	17.5	19	角 鉢	28.5
7	〃	11.5	20	壺	25.8
8	火 取	10.0	21	〃	8.0
9	〃	26.5	22	〃	13.5
10	壺	17.0	23	〃	18.0
11	鉢	11.7	24	〃	41.2
12	手 あ ぶり	17.5	25	〃	26.5
13	碗	5.5	26	植 木 鉢	43.0
					23.0
					21.2

職員の活動状況

(1971年1月～12月)

1971年	1月 5日～ 9日	八重山地方における石垣その他の調査(大城精徳)
"	1月15日～19日	宮古狩俣の民俗調査(上江洲均)
"	4月19日～22日	資料購入のため南部へ(上江洲均、玉城盛勝)
"	5月17日	コザ市における厨子甕調査(宮城篤正)
"	5月19日～29日	奄美群島の民俗調査へ(上江洲均)
"	5月21日～22日	資料購入のため北部へ(大城精徳、宮城篤正)
"	6月15日	北中城村渡口へ厨子甕調査(上江洲均、宮城篤正)
"	6月17日	資料購入のため南風原村照屋へ(宮城篤正)
"	6月23日～26日	久米島の民俗調査(上江洲均)
"	6月29日	北中城村渡口へ民俗資料収集(上江洲均、黒島惇)
"	8月 7日～ 9日	美術関係研究調査のため座間味へ(宮城篤正)
"	9月 4日～ 9日	伊平屋・伊是名盆行事調査(上江洲均)
"	10月10日～19日	鹿児島における南日本新聞社主催の「沖縄の文化財展」への出品する 所蔵品管理のため(宮城篤正)
"	12月25日～26日	大宜味村喜如嘉の民俗調査(上江洲均)
"	12月25日～28日	台湾の文化財視察(宮城篤正)

研究及び調査報告

粟国島巢銅原貝塚調査概報	新田重清	29
荒焼の判について	宮城篤正	39
沖縄の貝具	上江洲均	56

粟国島巢飼原貝塚調査概報

新 田 重 清

粟国島は那覇から約70Km離れた南部の離島である。従来、この島に関する考古学的調査は明らかではない。

1957年1月の下旬、筆者が糸満高等学校に勤務している折、高校入試受検の監督として粟国区教育委員会に出張を命ぜられ、数日間滞在した。その際に考古学的サーヴェイを行ない、同島には、集落の後方断崖下に前期の後葉から中期に至る遺跡2カ所（西御願貝塚・巢飼原貝塚）と字浜の砂丘地に後期砂丘系の遺物散布地を確認した。滞在日数の都合で表面採集程度にとどめ、後日調査の機会を待っていた。

それから5年を経過した1961年8月中旬、当時、琉大史学科学生、玉城盛勝君の助力を得て巢飼原貝塚の試掘調査を行なった。

調査は役所の仲里村長、粟国小中学校長上原先生をお初め多くの先生方、当時、糸満高校生の伊良皆賢哲・末吉良治・仲里悦雄・上原小一、沖縄高校生の末吉喜代治、首里高校生の与那城朝広君等の御好意と応援によってすゝめられた。

宿舍と料理は当時、糸満高校3年生の末吉正子様宅にお世話になり、宿舍の隣、与那城様の御厚意も忘れられない。又、ガイー大親のおじいさん、おばあさんは冷しコーヒーや昼食をわたしたちのために運んでくれたり、公看の糸満高校卒業生玉城幸子様にもいろいろお世話になった。

遺物の整理は浦添高校卒業生安室孝君が応援をしてくれた。

本稿を草するにあたり衷心から皆様にお礼を申し上げます。

尚、本稿は粟国島の遺跡のうち、巢飼原貝塚から出土した資料を紹介するとどめ、他の遺跡からの表採品や、粟国島に関する総合的な検討は、後日機会をあらためて考察することにした。

I 粟国島の位置・地形及び貝塚の環境

粟国島は北緯26度35分、東経127度14分に位置し、鳥島、久米島と同じく共に琉球孤島内帯に沿い、霧島火山帯に属する。島は周囲約3里で半円形状をなし、火山岩（緑色安山岩質と白色浮石質の凝灰岩等）と隆起珊瑚礁から形成されている。地勢は南および西海岸が絶壁で屹立ち、火山岩の西南部の標高96メートルの地点から北及び東に緩かに傾斜し、本貝塚付近で隆起珊瑚礁に接し、東海岸の砂丘に連なっていく。（第1図）

隆起珊瑚礁は三つの段丘をなし、本遺跡は標高50メートルの第1段丘上に形成されている。（写真7）

貝塚西壁面から2メートル離れた地点には約10メートルの断崖が切り立ち、この断崖は西南に延びて貝塚の地点から断崖に沿う100メートルの地点には洞窟内から湧出するエーガー泉、更に西南端には西御願貝塚がある。（写真4.5.6及第1図）西御願貝塚の上方は畑地になっているが、そこには土倉小と呼ばれる土を盛りあげたところがあり、外見は本土の前方後円墳に類似するが、地元では物見又は祭祀の遺跡ではなかろうかと語り伝えられているようだが、詳しい調査をしてないので明らかではない。

巢飼原貝塚東側からは島の北岸の野巖に通ずる道が開設されており、その道を南に下れば、字東と字西を境界する村道につらなる。従って本遺跡は道路の沿線に沿うところにあつて、部落の一番後方の屋号ガイ一大親の上方の荒地にある。発見当時は甘藷畑であつたが、現在は耕作されずに放置され荒地になって雑木が繁茂している。

遺物は広範囲に散布しており、後方の断崖上の原野からも採集された。

II 発窟経過

断崖に沿うて南北方向に2 M×4 Mのトレンチを明け、南側から2メートル四方のブロックを設定して1ブロック、2ブロックと名称をうち、7 cm毎の発掘をこゝろみた。

第1層においては、東壁側が20 cm前後で最も厚く他は10 cm前後で浅い。この層は耕作のため攪乱されており、出土遺物も僅少である。第2層は包含層で黒褐色又は黒褐色混土貝層（マイマイを主体とする層）を呈し、上部は攪乱されているが、殆んどは未攪乱層である。東壁側においては20 cm前後西壁側中央部の最も厚い地点で30 cm前後測定され、地山の黄褐色層又は基盤石灰岩に達する。（第2図及写真9～12）。基盤石灰岩の一部が2ブロック西壁側より露出している。（写真12）包含層は南壁側よりも北壁側より厚くなる傾向を示しているの、遺跡の中心部はもう少し北より側かと考えられる。

第2層は包含層で土器の出土が最も夥しく検出されたが、層が浅く、しかも上部が攪乱されているので層序的变化は把握しがたい（第2図）。

III 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は、大別して人工遺物と自然遺物とに大別される。人工遺物では土器が最も多量に出土し、石斧も若干検出された。

土器について見るに、器形は甕形や壺形を主体とし、少数ながら鉢形も見られる。

甕形土器は有文と無文にわけられるが、有文の場合は、口辺部が殆んど平縁で、文様は二又状なる工具で施文された点刻文と工具をひきずるように施文される場合に生ずる線文とがある。又、方形状の単管か半截竹管状の工具で横捺していくものも見られる。

文様は口縁に沿うて展開し、口唇部にも同種の文様が見られる。

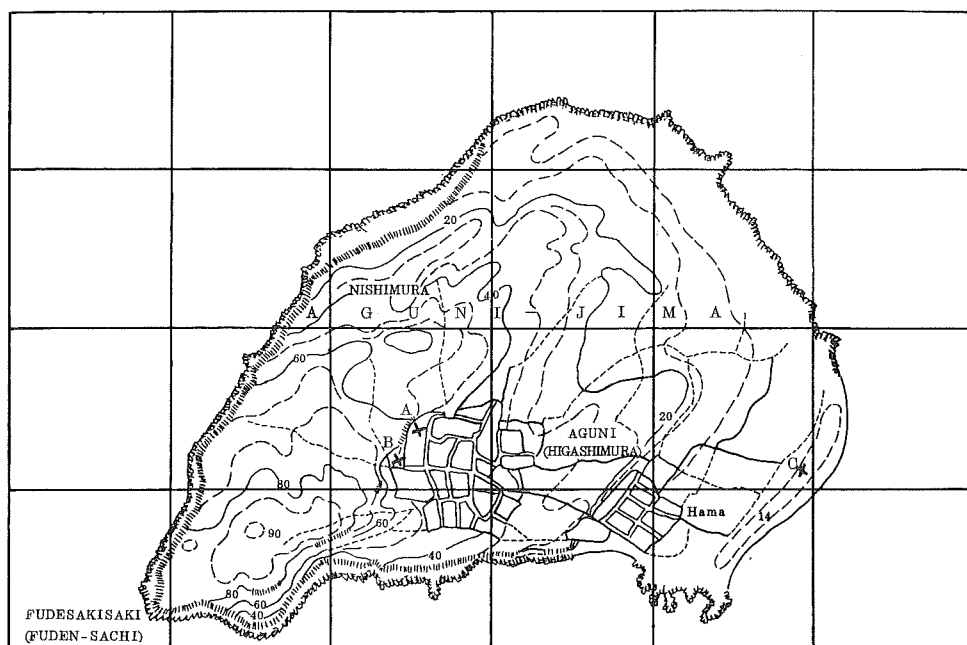
器壁の厚さは、平均して0.7～0.8 cmが多く、中には0.5 cmの薄手のものもある。焼成は普通で、色調は赤褐色を呈するものが多く、胎土はよく精選されていて微粒の砂が混入している。

有文の甕形土器と把握されたものは第3図1～4、7、8、10、11及第4図16である。

第3図1は焼成良好な黄褐色を呈する土器で口縁部の縁を張りつけにして肥厚させ、二又状工具による点刻文又は点刻線文が施されている。口唇部にも装飾体としての瘤状の張りつけが施されておりその上面にも同種の文様が見られる。点刻線文は口縁に垂直に施されており、頸部にみられる隆起帯まで及んでいる。

同図8は心もち外反する甕形土器で色調は褐色を呈し、口縁部断面が有段をなす、いわゆるキャウチバンタ式に、横捺刻文が施されたものである。

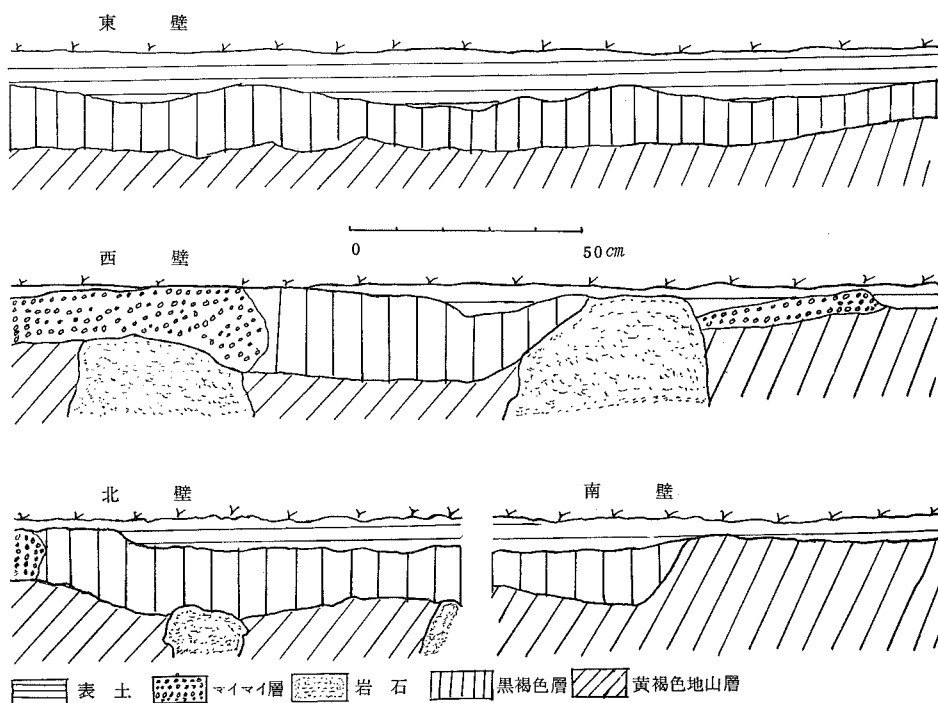
第4図16は直口状の焼成良好な煉瓦色を呈する土器に二又状工具をひきずるように施文されたもの



Scale 1 : 25000

- A 巢飼原貝塚
- B 西御願貝塚
- C 砂丘遺跡

第1図 粟国島遺跡分布図



第2図 粟国島巢飼原貝塚トレンチ断面図

で、施文後の形状は一見横捺刻文状を呈している。文様は口縁部と口唇にもみられる。

無文の甕形土器（第4図8、9、12～15及第5図1）は口縁部の平縁か山形突起をなすものとに類別され、断面は有段をなすカウチバンタ式形状のもの及び市来式の影響をうけたと考えられる三角形状のものとが見られる。器壁の厚さは、肥厚部で0.8～1.0 cmと計測され、カウチバンタ式形状の土器の胎土には粗い砂や石粒が混入している。

第4図9は口縁部が山形突起をなす土器で、断面は市来式のように三角形状をなして頸部あたりでくびれている。色調は黄褐色を呈し、胎土には石英片の混入も見られる。

器面には柔らかい繊維質の擦過痕も見られ、^{註1}外器面には有機質の粘着性のものが付着している。^{註2}この種の土器の出土は読谷村赤犬子遺跡や那覇市天久遺跡から報告されている。

同図12～15はカウチバンタ式と把握される土器で、14は焼成粗悪な茶褐色土器で、口縁部はやゝ外反し胎土には細い石片や砂が多量に混入して器面には無数の白い斑点が見られる。器壁の厚みはほぼ一定し、有段の「くびれ」あたりが僅かにふくらみを見せてカウチバンタ式の形状をとどめている。この種の土器は「カウチバンタ式」から後期の無文土器への推移をうかがわせる資料かと考えられるが層序的把握や形態的な検討を加えてないので明らかではない。

第5図1は心もち外反する甕形土器で色調は外器面黒褐色、内器面茶褐色を帯びて、器面調整の条痕がみられる。この土器の断面は口唇部あたりが薄く、次第に厚みを増して器壁がほぼ一定してくるが、頸部あたりで僅かに有段状のくびれが認められる。

壺形土器（第3図13～19及第5図1～6）の主体をなすものは宇宿上層式（沖縄では宇佐浜式に比定）の範疇内にぞくするもので、口縁部の断面が三角形状又は丸味を帯びた蒲鉾状を呈するものが多い。器壁の厚さは平均して0.5～0.7 cmの薄手のものが多く、最も厚みのもので1.0 cm計測され、焼成は普通で、色調は褐色、黄褐色、赤褐色を呈するものが多い。文様は横捺刻文が多く、僅かに沈線文や隆起文もみられる。

第3図17は器壁がほぼ一定した黄褐色を呈する土器で肩部あたりに方形の突帯がはりつけられている。文様は方形の工具による横捺刻文で、突帯上と口唇部にみられる。

同図18は口縁部の断面が三角形状を呈する薄手の土器で、胎土はよく精選され雲母片も散見される。文様はみみず脹れ状の細隆起帯に上下対象の点刻を施したものである。

第4図1もこれに類するものである。

第3図19は口縁部の断面が正三角形状を呈する最も厚手の土器で、色調は黄褐色を呈し胎土には石英片や砂粒が混入している。文様は工具をひきずるように施文した微弱な横捺刻文である。

第4図5は口唇部が肥厚し蒲鉾状を呈する無文の壺形土器で、色調は茶褐色を帯びている。宇宿上層式の無文、肥厚口縁壺形土器に分類されるものである。

以上、紹介した口縁部片の他に外耳土器と特殊な文様展開を示すと考えられる隆起文土器とがある。

第4図17は横耳型の外耳土器で、3.8 cm × 1.5 cm、高さ（最大）0.8 cmと計測される。器壁の厚みは0.7 cm位で一定し、胎土には白い物質の貝殻片又は石粒が混入している。器面調整のための条痕もみられ、土器の色調は外面淡褐色、内面茶褐色を帯びている。これに類する土器が西御願貝塚からも検出された。

第5図2は赤褐色を呈する隆起文土器であるが、口縁部は欠損している。現存する標品からは文様の展開は明らかではないが、口縁に沿って施された二条の隆起帯は口縁に垂直する隆起帯によって切れ、恰も「ヒ」の字を裏返しにしたような形状をしている。

底部は第5図3～5で、丸底と平底及び丸底の底を軽く平たくたゞいて丸底と平底の中間形式を示すものと分類できるが、本遺跡では丸底が主体をなしている。

石斧は大別して短冊型と撥型をなすものと類別されるが、片面は磨製か半磨製、他の面は半磨製か打ち欠きの粗面が見られる。

第5図6は短冊型の偏平片刃石斧で両側面には打ち欠きの跡が見られ、刃部もつぶれている。

同図8は撥型をなす石斧で、片面は磨製、他の面は打ち欠きの粗面だけであるが、使用のためか粗面の凹凸は差程感じられない。刃部はするどい衝撃によって破損したと考えられる使用破痕が認められる。背面が彎曲し、そり返った状態になっており、堅縛のためか頭部には大きい打ち欠き痕が見られる。土掘り具として使用されたものであろうか。

IV 結 語

以上、巣飼原貝塚出土品について土器を中心に記述してきたが、文様の手法では古式を感じる資料も見出されるが、包含層が単一層で、しかもその主体土器が宇宿上層式であることからして、本遺跡の編年は多和田真淳氏編年の後期^{註3}上半期（高宮広衛氏の中期）に位置づけられると考えられる。しかし、前ハワイ大学ピアソン教授のカーボン測定資料（ 760 ± 80 BC）や西御願貝塚の資料から推察して粟国島における人間の生活の展開は、沖縄の新石器時代の前期あたりから展開するものと考えられる。粟国島における遺跡の編年は西御願貝塚⇒巣飼原貝塚⇒浜の遺物散布地（後期砂丘遺跡）と位置づけることができるが、これは集落の展開や経済活動の拡大とも関連するもので興味深いものがある。

これまで報告された中期遺跡（高宮氏編年）は、土器が大量に出土し、自然遺物は皆無か僅少だと報告されているが、本遺跡ではマイマイ類を主体とする混土貝層が見られ、この層が遺物包含層になっていることからして従来の様相とは違った状況を呈している。この点において本遺跡は重要な問題を提起する注目すべき遺跡だと考えている。

沖縄の新石器時代における栽培文化については、すでに多和田真淳氏はヤム文化・サトイモ文化の存在を考説されておられるが、筆者も中期栽培文化論を考えたことがある。

本遺跡から片刃石斧や撥形石斧及び外耳土器が検出されたこと、更に後期砂丘系の浜遺物散布地から八重山下田原系のヘラ状石斧が採集されたことは、その内容において農耕の様相を想定させるものであり、これを契機にして中期～後期における生産様式の積極的な検討が痛感される。

註1. 高宮広衛・多和田真淳「読谷村赤犬子遺跡調査報告」

（文化財要覧、1961年版所収）

註2. 高宮広衛「那覇市の考古資料」（1968年那覇市史編集室）

註3. 5. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」

（文化財要覧、1956年版所収）

註4. 「琉球諸島におけるラジオカーボン測定値とその編年の意義」

（「考古学ジャーナル」1969年12月号所収）

註6. 新田重清「最近の沖縄における考古学界の動向」

（琉大史学創刊号所収、琉球大学史学会）

註7. 粟国島・久米島具志川村調査報告

（郷土第7号、沖縄大学・沖縄学生文化協会1968年11月）

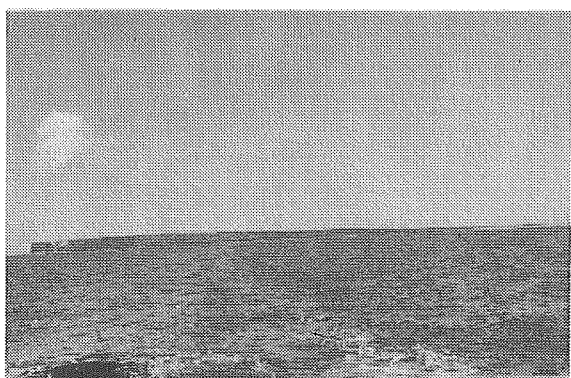


写真1 栗国島遠景

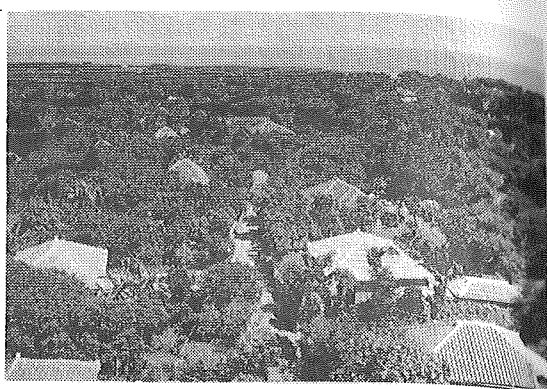


写真2 巢飼原貝塚付近から部落をのぞむ

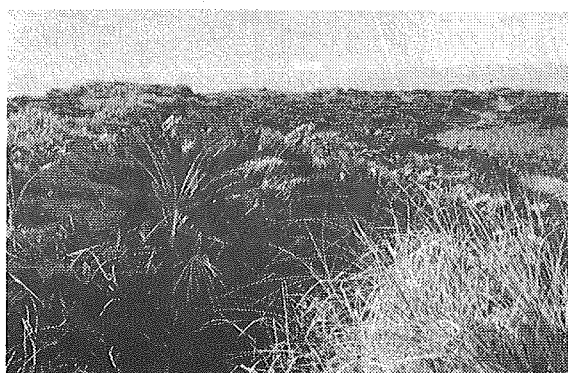


写真3 ソテツの群落



写真4 西御願貝塚をのぞむ
(×印 西御願貝塚)

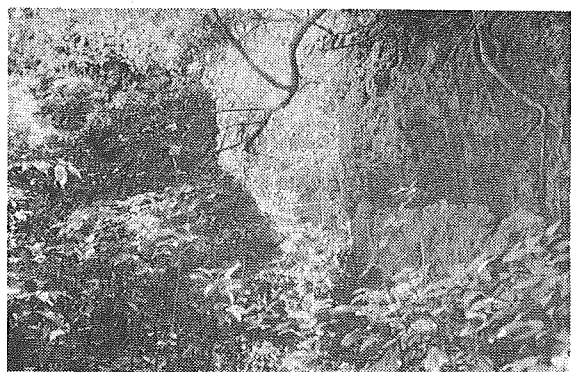


写真5 西御願貝塚

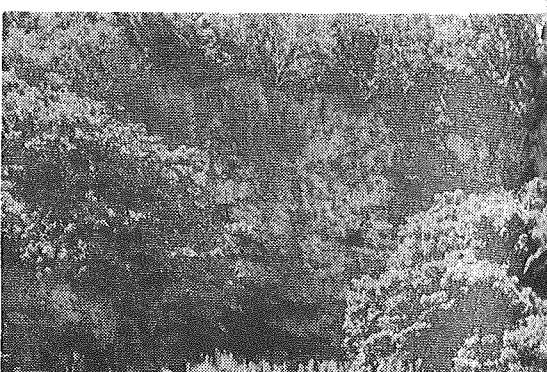


写真6 エーガー
洞穴内から清水が流れている。

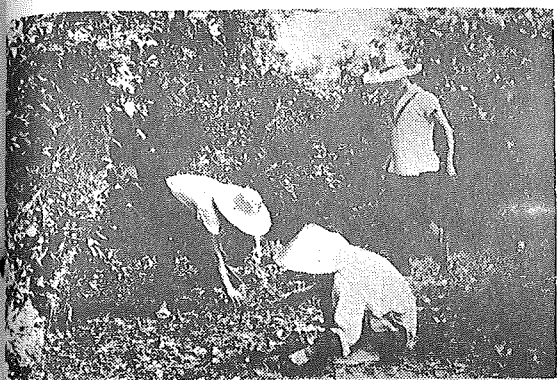


写真7 巢飼原貝塚
発掘前



写真8 巢飼原貝塚
土器の出土状況

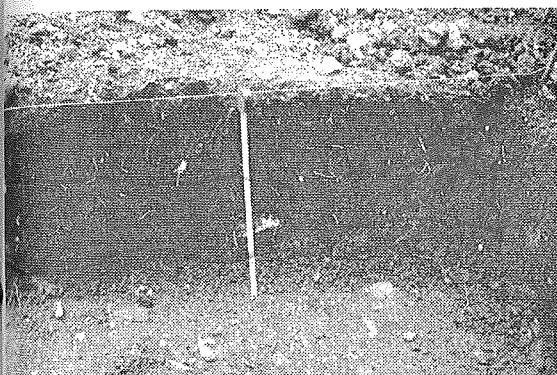


写真9 巢飼原貝塚
東壁断面



写真10 巢飼原貝塚
北壁断面

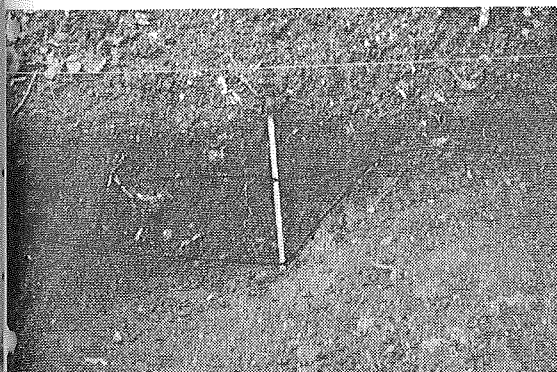
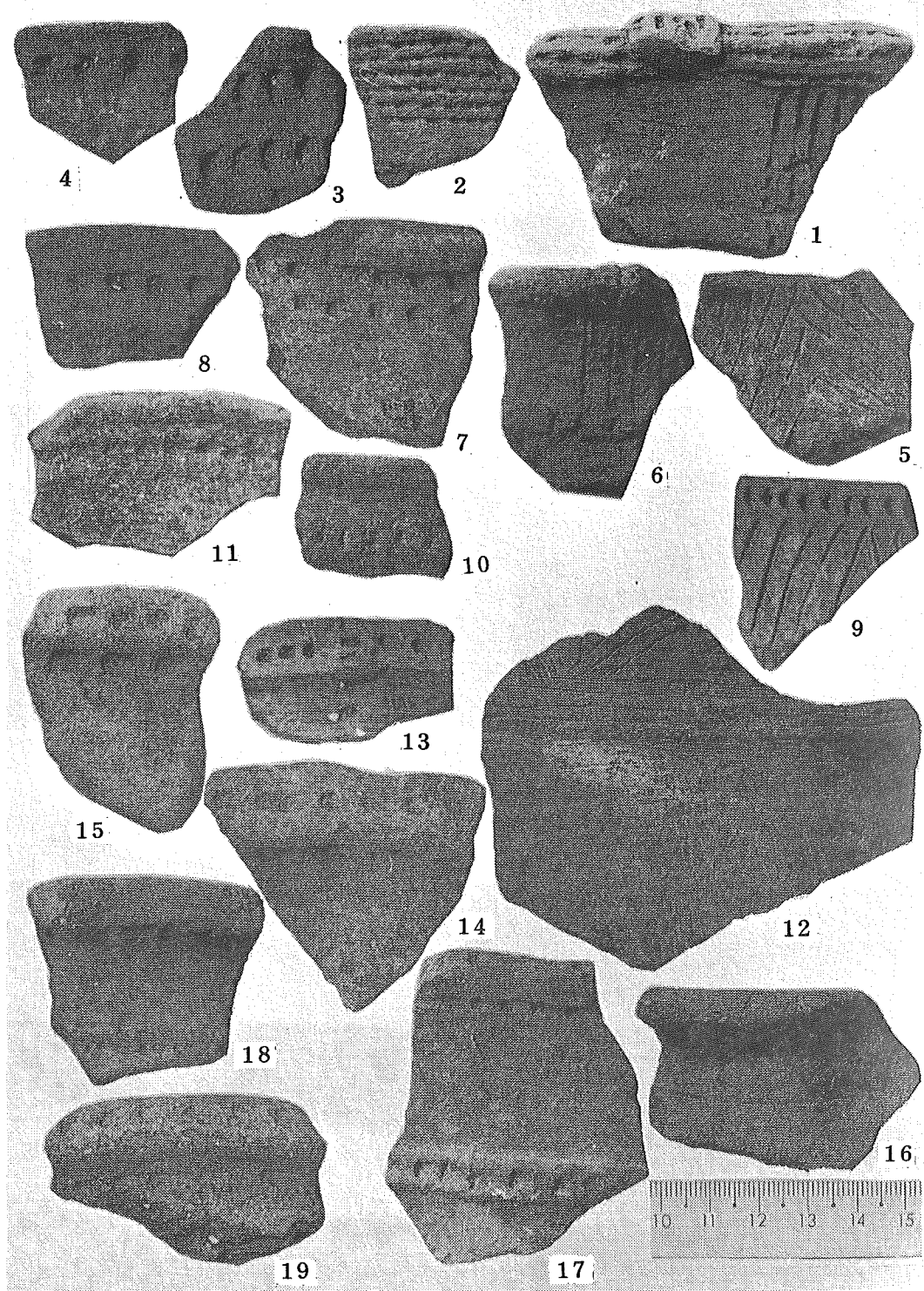


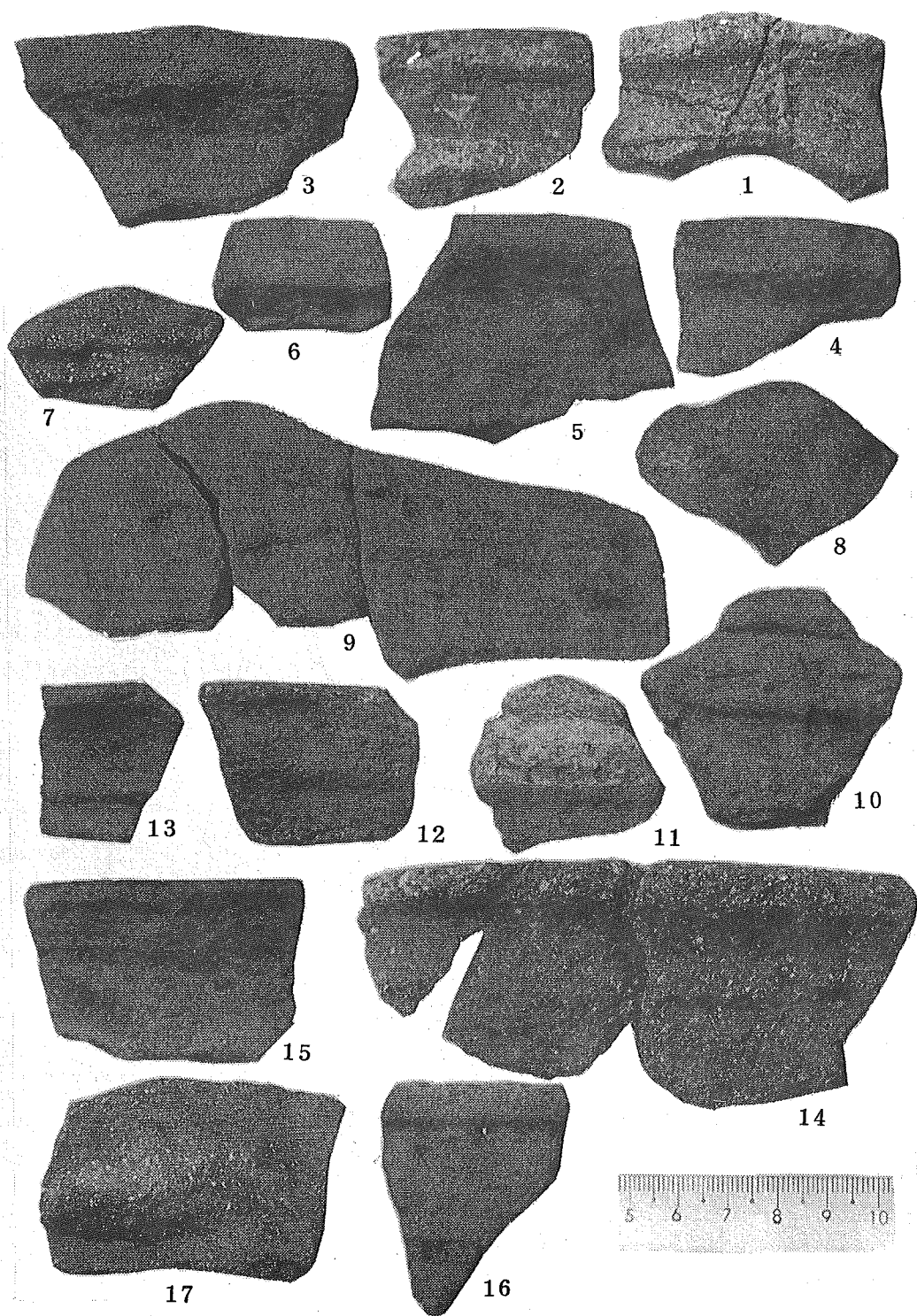
写真11 巢飼原貝塚
南壁断面



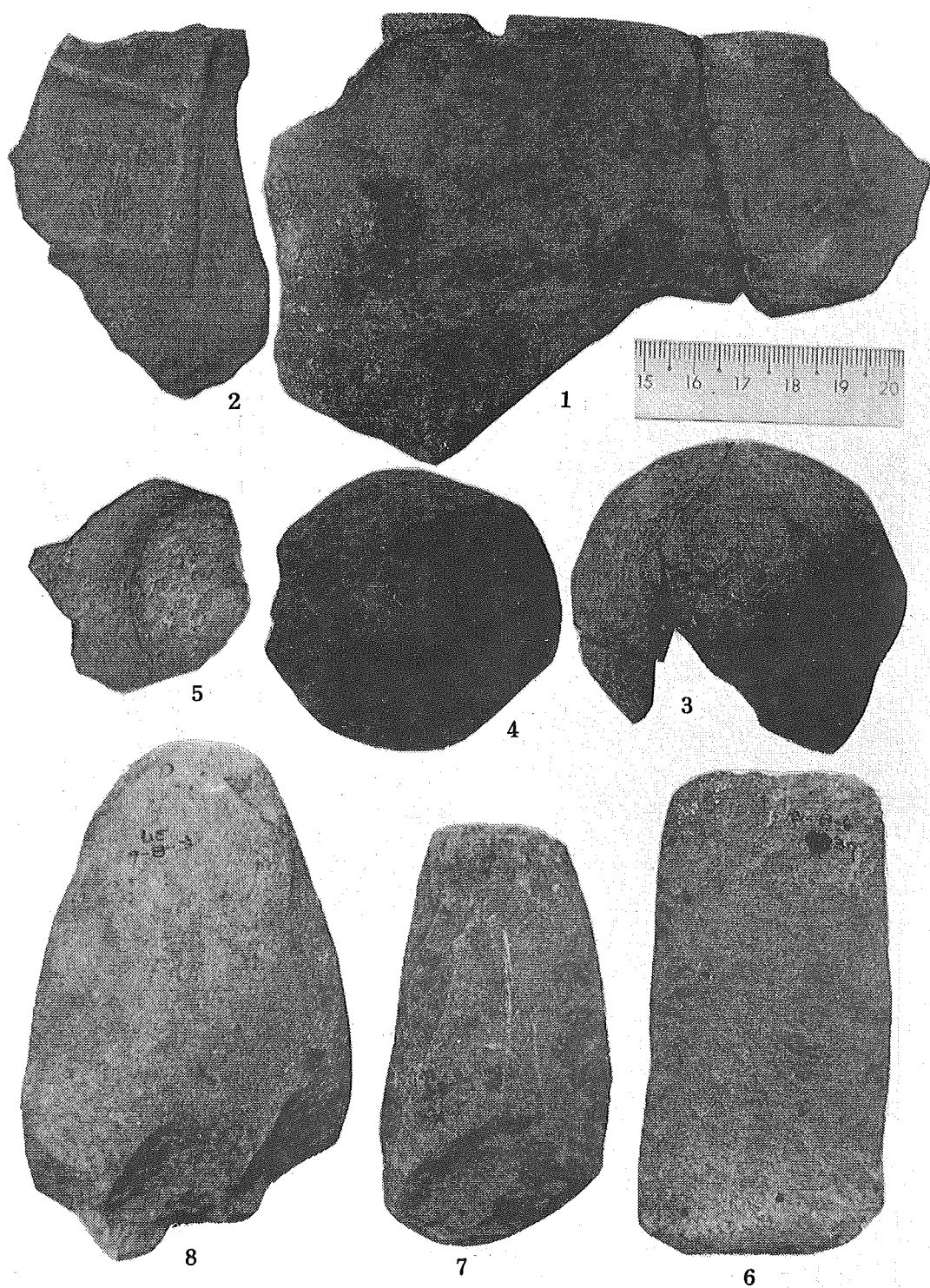
写真12 巢飼原貝塚
発掘後のトレンチ



第 3 図 栗国島巢飼原貝塚出土土器



第 4 図 栗国島巢飼原貝塚出土土器



第 5 図 栗国島巢飼原貝塚出土土器及石斧

荒 焼 の 判 に つ い て

宮 城 篤 正

沖縄の陶業史には、まだまだ分らないことが多い。^{あらやち}荒焼の壺や甕に記された「^{はん}判」もそのひとつであろう。

この判について、数年前までは研究家の間でも注目されず、その上、とんでもない見当違いの意見さえ飛び出す始末であった。

これまで、ヤチムン会員が精力的に全島を駆け巡り、収集した荒焼の甕や壺の中から、いろいろ違った判の拓本をとり、現在までにかなりの数集まった。これら種々様々の判を整理、分類して、研究を進めるならば、あるいは陶器鑑定の決め手のひとつになるかも知れない。

しかし、そこまで到達するには、更に多くの資料を収集し、考察をする時間的余裕がなくてはならない。ところが、残念なことには現在、そういう余裕が全くなく、単に荒焼の判を紹介する域をでない。まず、この点を断っておきたい。

次に、沖縄でいう判については、本土の窯印に相当する。しかし、多少ニューアンスが違うむきもあるが、沖縄では窯印とは呼ばずに、「^{はん}判」と称している。この判には印判もあるが、殆んどはヘラなどによるじか描きの文字もしくは数字や記号である。

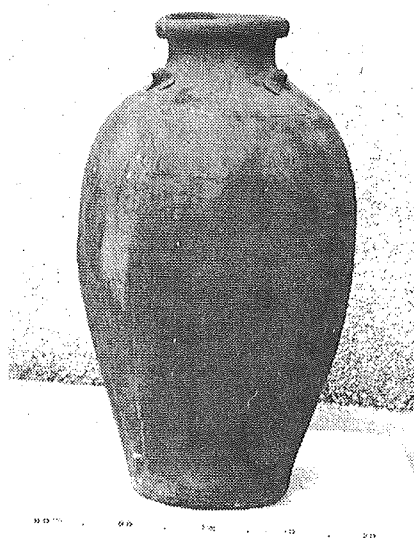
判の大半が壺の肩の部分に記され、胴部や口辺部、底部に刻まれたのは非常に少ない。判の必要性として、考えられることは、共同窯で、その上、カーミ市（甕市場）で販売する際、どの業者の製品かということが一見して分るためである。

壺屋では業者を屋号で呼んでおり、判も「^{はん}〇〇の判」といい、この〇〇の部分に屋号をあてはめて呼ぶ。一方、古今東西を問わず、人間本来の欲望ともいえるが、後世に名を残すための判も考えられよう。しかし、沖縄においては、そのようなことはきわめて少なく、殆んど例外としてかたずけてよいと思われる。

沖縄における最古の瓦といわれるものに浦添城跡などから出土する「高麗瓦」がある。その瓦には「癸酉年高麗瓦匠造」の逆文字の判がある。この古瓦について、おおくの研究家は「沖縄で焼かれたもの」との見方をとっている。

同時に瓦の製作年代もまた問題になる。すなわち、「癸酉年」を1153年とする説と1273年説に分れるが、後者の説がこれまで有力であった。ところが、最近、前者の時代までさかのぼるのではないかとする見方もかなり強くなってきている。

沖縄における瓦焼きについて、文献では、15世紀に中国帰化人が真玉橋邑に窯を開き、瓦を焼いたのに始まる。しかし、前述の高麗瓦と中国帰化人が焼いた瓦とは、時代



荒焼のカーミ（甕）

的にかなりのずれがある。その空白をどのように埋めたらよいか、いまのところ確証が得られない。

なお、今からおよそ19年ほど前に壺屋の島袋常汪氏の古い家の屋根瓦を葺替えた際、「乾隆三年」在銘の男瓦が発見された。乾隆三年（1738）は今から234年前である。

沖縄本島の読谷村に有形、無形の南方系の文化が今日に伝えられている。往時、読谷村の長浜は南方貿易港として栄え、その港から南方の文化が輸入されてきた。その例を読谷山花織にみることが出来るが、陶器としてその例にもれない。すなわち、沖縄の古窯のひとつである喜名窯跡から、これまで採集された陶片をみると、その殆んどは素焼（南蛮手）で占められている。

その昔、タイ国のラオロン酒を容れて輸入された南蛮甕が喜名で焼かれた甕などに影響を及ぼした形跡がみられる。喜名窯で焼かれた壺や甕の成形や焼締などから推して、かなり進んだ技術が伝えられていたとみることが出来る。判も窯跡から採集された陶片から「^十七」とか、「^三」などのあることが確認されている。しかし、これはほんの一例であることはいうまでもない。

喜名窯と地理的に近い位置にあるのが、知花窯である。^{ちばな}この両古窯は同年代に平行して開窯されていたか、もしくは喜名窯が廃窯になった後に知花に窯が移ったかは明らかでないが、いえることは、非常に似通った壺や甕を焼いていた。ここから採集した陶片にもまた「^十」とか「^八」、「^七」、「^六」などの判がみられる。参考までに古我知焼甕にも「^十」の判があるのをこれまで何回かみたことがある。

さて、文献によると、1682年に美里村知花窯と首里の宝口窯、那覇の湧田窯の三ヶ所が、現在の壺屋に統合され、今日なお、伝統の火を絶やすことなく生産を続けている。壺屋の地に移窯してからも、荒焼は益々盛んに焼かれ、日露戦争の頃はその最盛期を迎えることになった。

「壺屋における荒焼の判一覧表」は年輩者の記憶をたよりに、最も盛んだった頃の業者判をまとめたものである。ただ、その場合、記憶だけを頼りにしているので、実際の判とがうまくかみ合わない点があるように思われる。一例をあげるならば、「^八」の判であるが、いくら探しても発見出来ない。その反面、単に「^八」の判はよくみかける。また、上1島の「^上」は単に「^上」か、もしくは「^上」ではなかったかという気がしてならない。

このような例は拓本と一覧表とを比較すれば他にもたくさんあろう。また、一覧表にあるもの以外を喜名窯とか知花窯とかの判に結びつけることも納得出来ない。なぜなら、同じ数字の判でも喜名や知花、壺屋でも使用されている可能性が非常に強いからである。実際にこれまでの調査では、そういう感じを受けている。ただしかし、書体や筆順、字の大きさなどの違いがあることは考えられる。

一般的にいつて、時代が古くなるほど判の字がのびのびとして上手になる傾向があるように思われる。本土あたりでは、判や窯印のある壺はあまり古い時代まではさかのぼらないとよくいわれている。しか

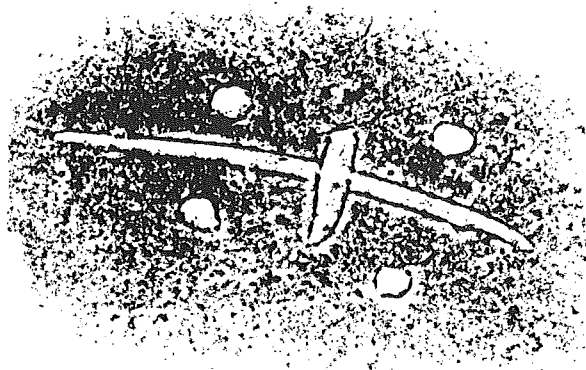


判の甕焼荒

し、沖縄の場合もその例があてはまるかどうか。

喜名や知花焼の甕にも判が使用されている。しかし、古くなるほど、その数は少なくなる傾向は確かなようである。

一方、印判のおされた壺や甕についてみると、明らかに沖縄の荒焼甕とわかるものと、もう少し研究を要するものが半々である。



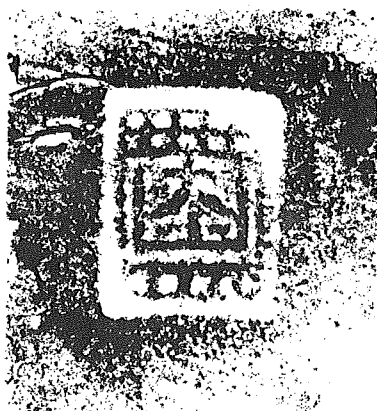
判の一例（拓本）

試みに「壺屋における荒焼の判一覧表」と拓本と一致するものを抜き書きすると下記の如くである。

No	屋 号	判	拓 本 の 番 号	備 考
1	西 与 儀	土	80 87 86	80 は書体が全く違う。
2	田 ノ 端	王	28 ~ 31	86 のカメには 152 の印判あり
3	新 屋 敷 小	半	73	王の筆順がおかしい。
4	新 屋 敷	土	65 ~ 69 70 84 85	68 は八重山焼
5	宜 保	八	88 90	ただし穴なり
6	前 ノ 島	米	127	
7	灶 ノ 側	全	18 19	
8	下 トーファー小	シ	32	
9	川 根	全	59	
10	東 リ ト ケ シ 朝 定	大	149 ~ 151	
11	玉 井 小	テ	122	

上記の表によると、壺屋の業者 39 のうち 28 業者の判が不明である。そのかわり、一覧表にない判がなんとおおいことか。

その疑問がひとつの動機となって、判を比較研究してみようと考えた。そこで、一覧表をもう一度、再検討してみなければならないという結論を引きだしたのであった。

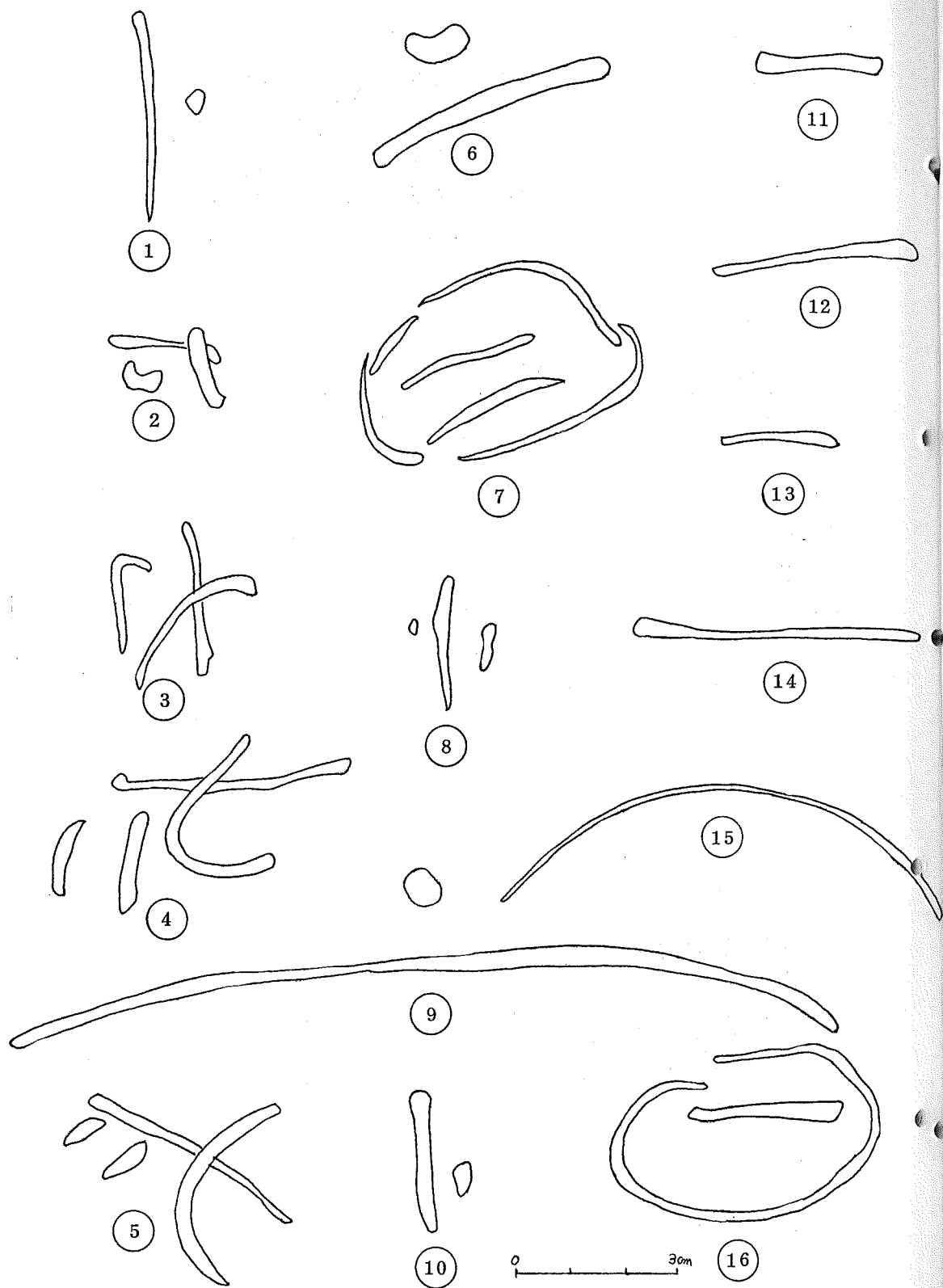


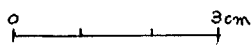
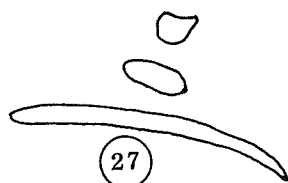
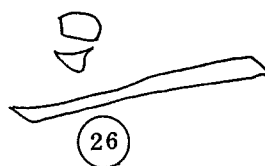
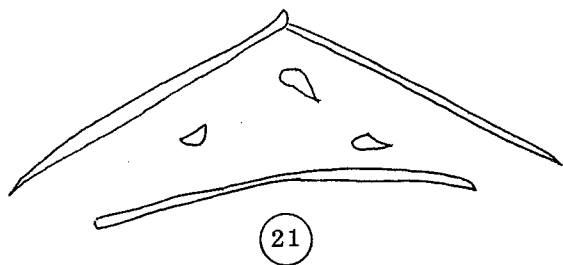
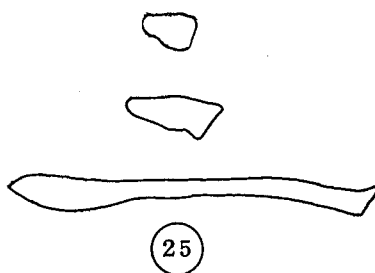
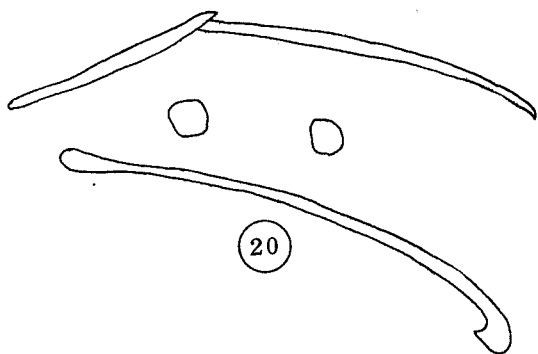
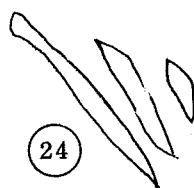
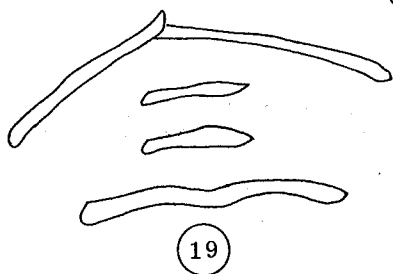
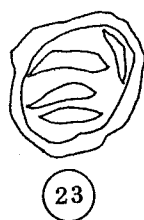
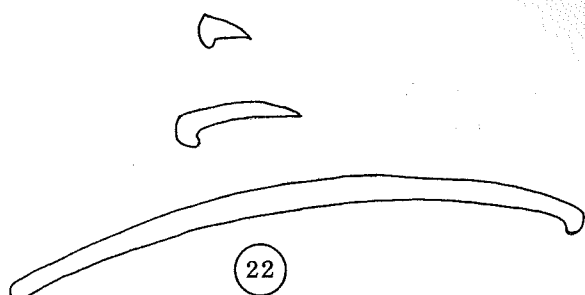
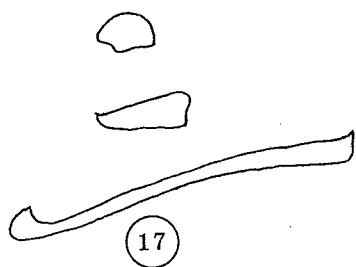
印判の一例（拓本）

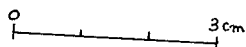
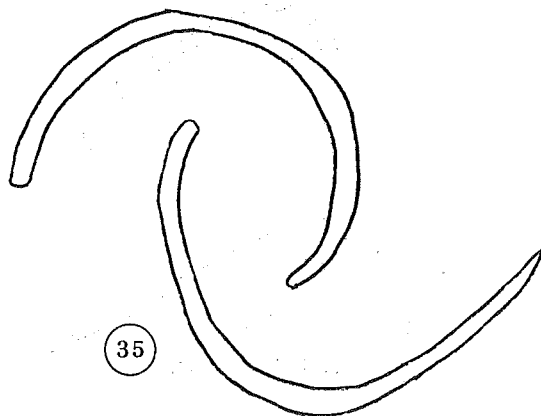
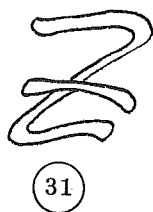
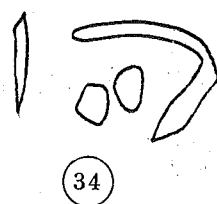
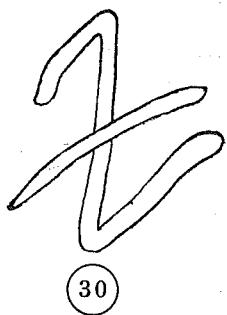
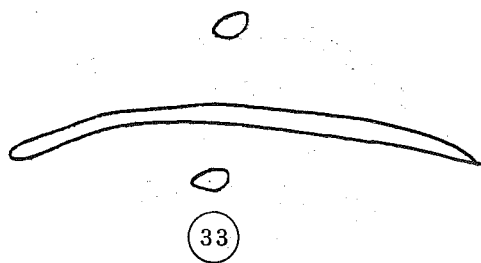
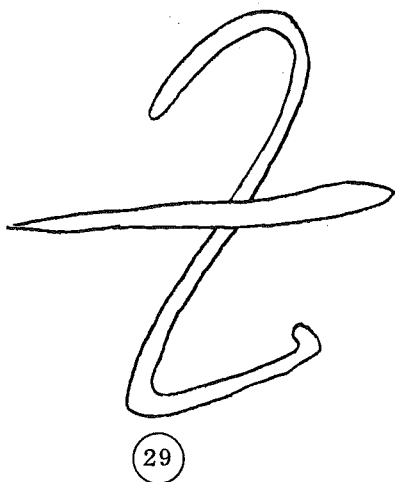
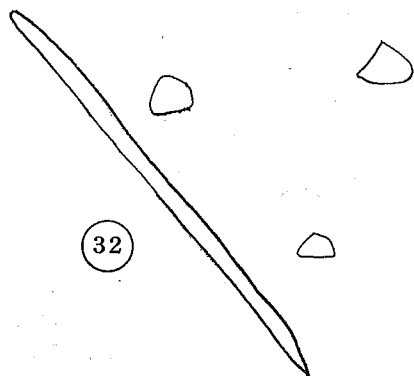
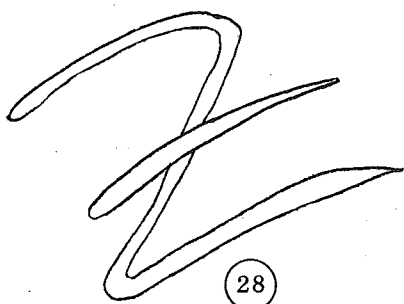
八重山焼の判を拾ってみると、61、68、91、104、107 などがあり、また 154 と 158 から 161 にかけては、パナリ焼に描かれた判の一例で荒焼の判と比較する意味で参考までにあげておいた。今回は主として、古い時代から戦前の荒焼の判を紹介したが、戦後は必要に応じて片假名で陶工の頭文字を記入している。

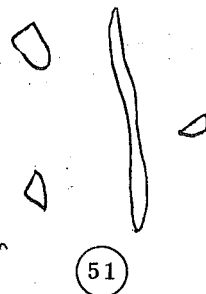
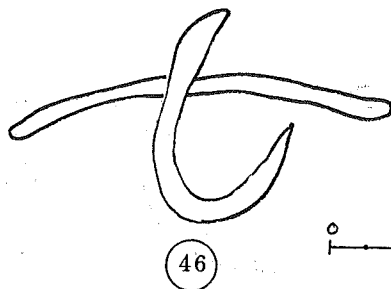
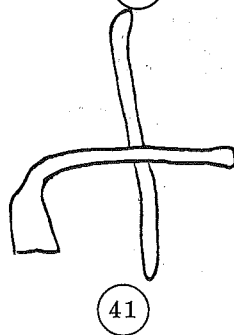
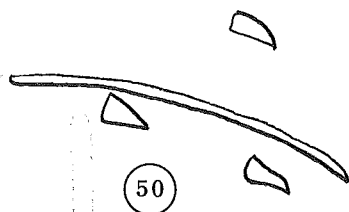
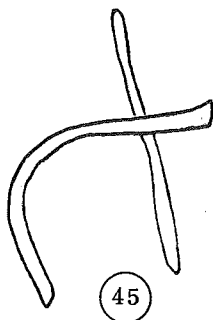
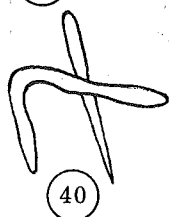
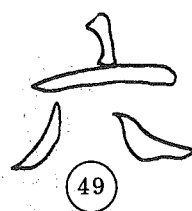
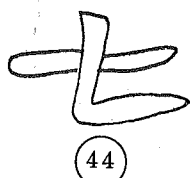
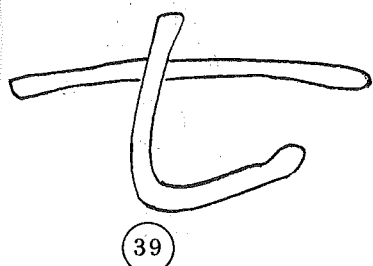
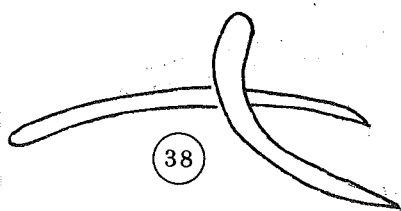
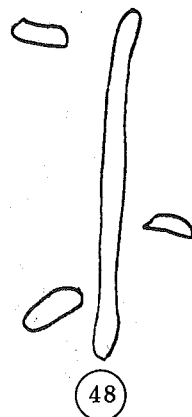
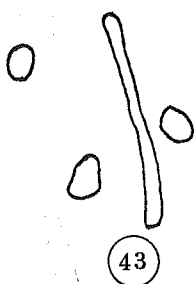
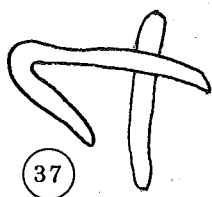
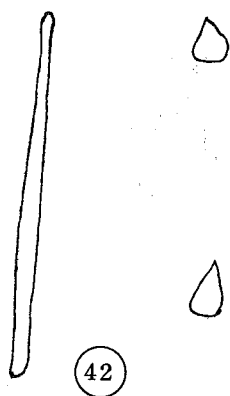
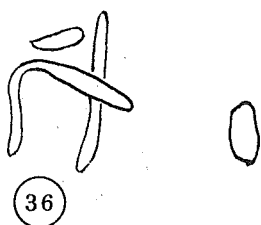
今後は、中国、朝鮮、南方、更に薩摩、能野、備前など、各々の窯印と比較研究も必要になってこよう。その点で、もっとおおくの資料を取揃えて、整理、検討を加えたい。それと同時に、古我知、喜名、知花、壺屋など、各窯の判を総合的にまとめて発表したいと考えている。

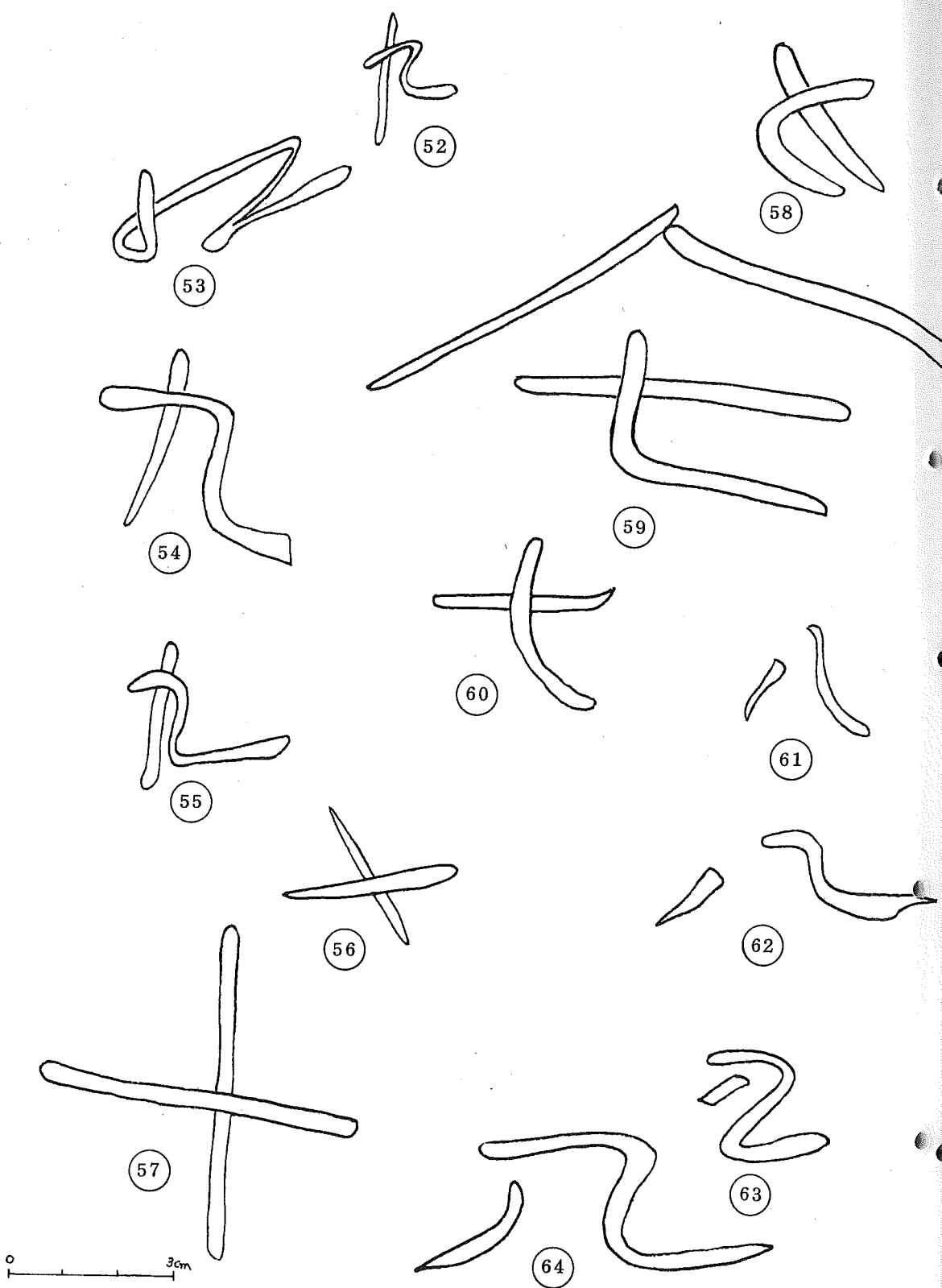
最初に断っておいたが、今回は、雑然と判の紹介をするだけにとどめ、後日、稿を改めたい。

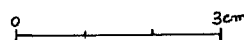
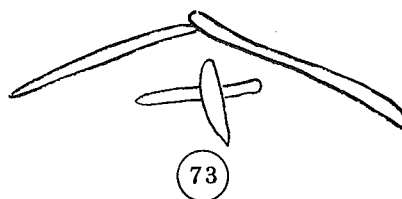
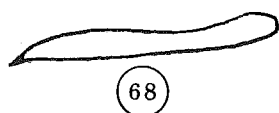
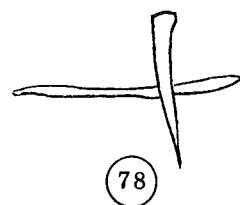
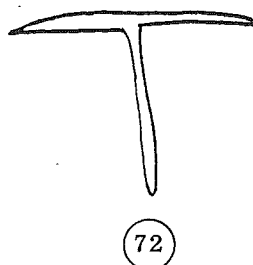
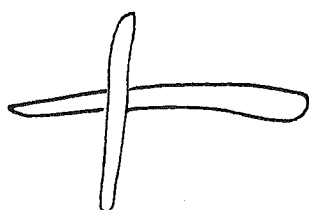
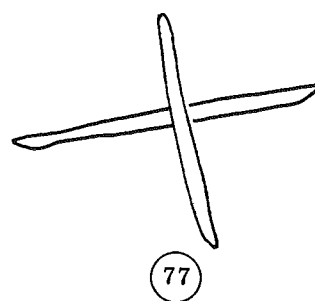
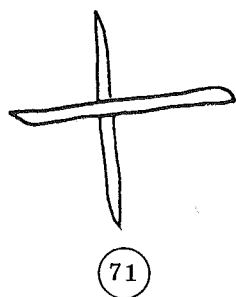
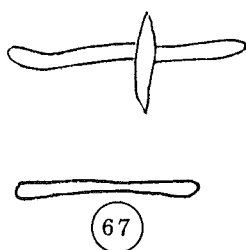
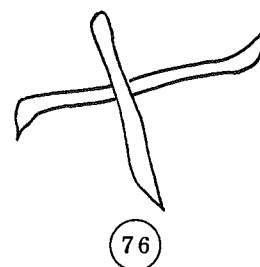
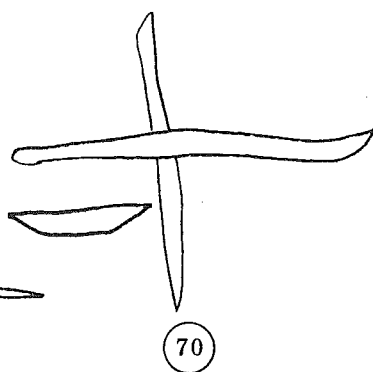
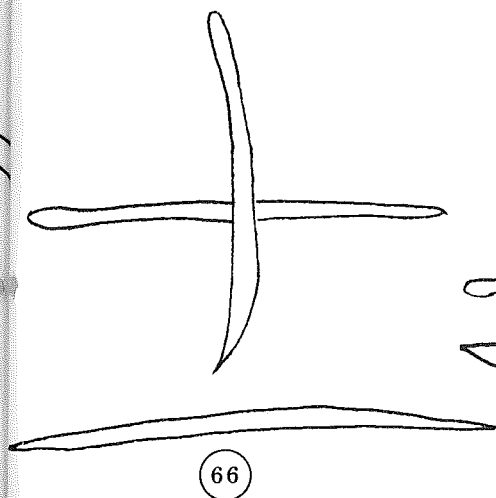
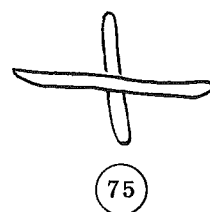
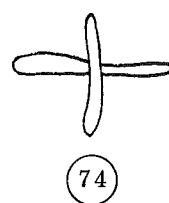
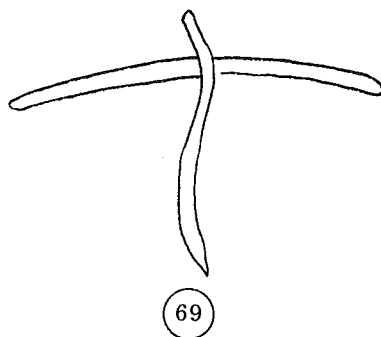
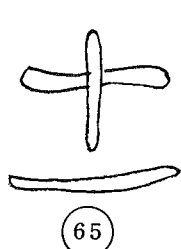


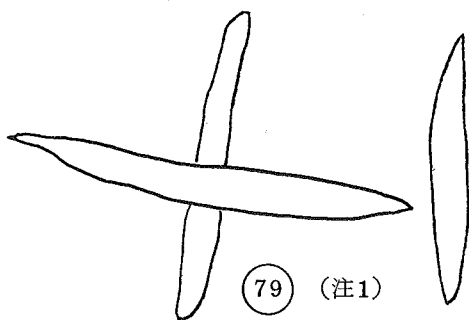




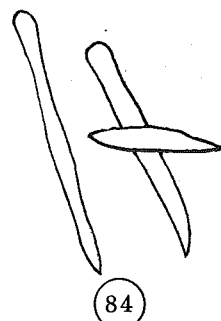








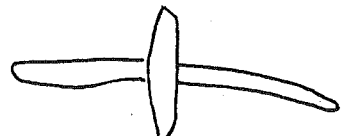
79 (注1)



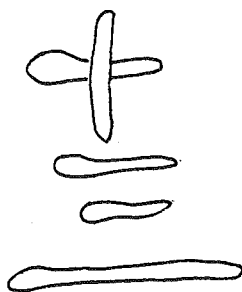
84



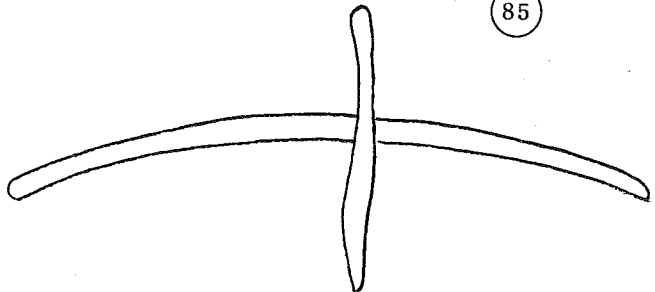
80



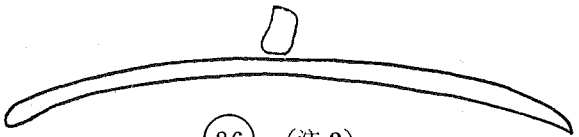
85



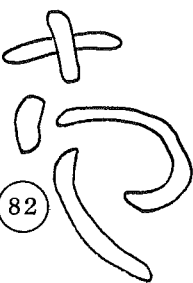
81



86 (注2)



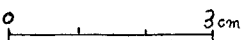
87

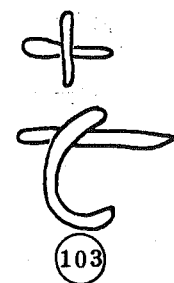
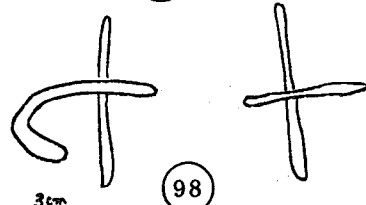
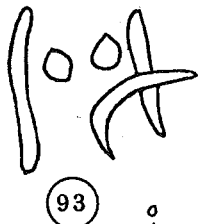
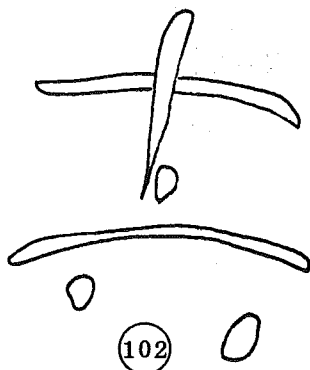
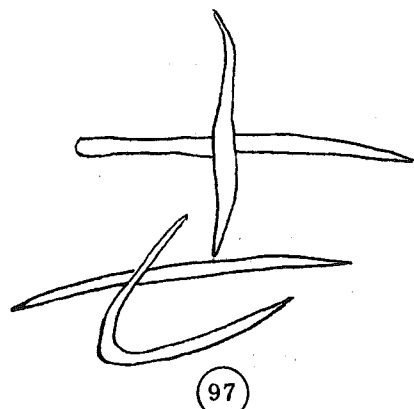
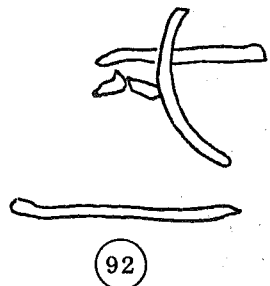
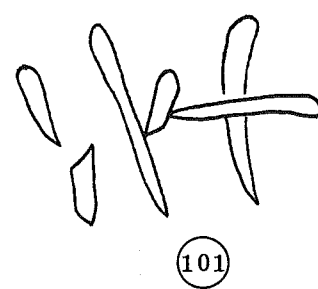
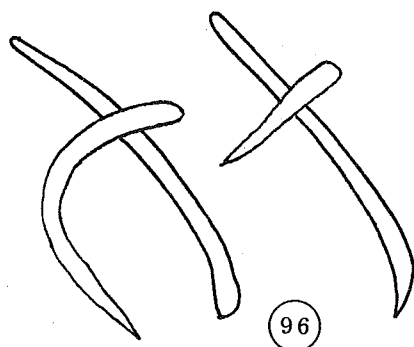
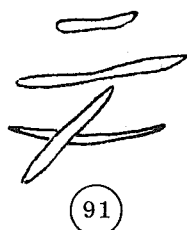
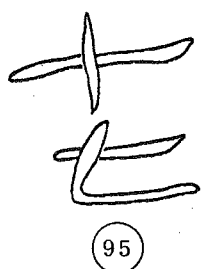
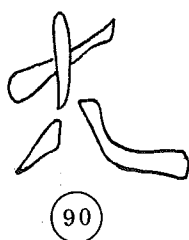
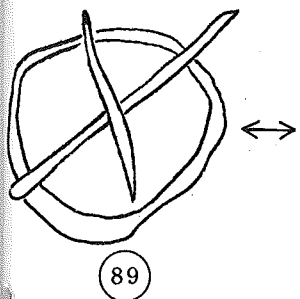
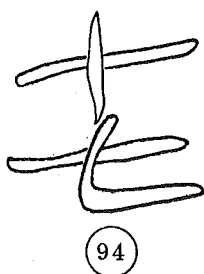
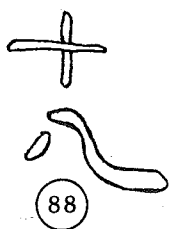


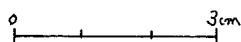
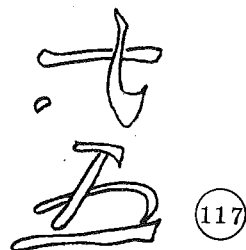
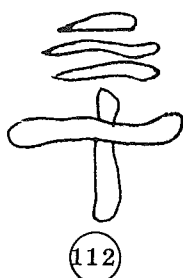
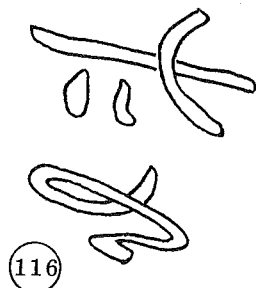
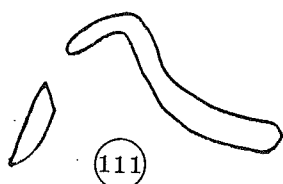
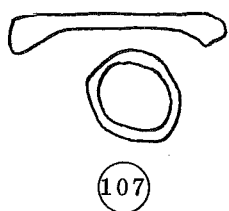
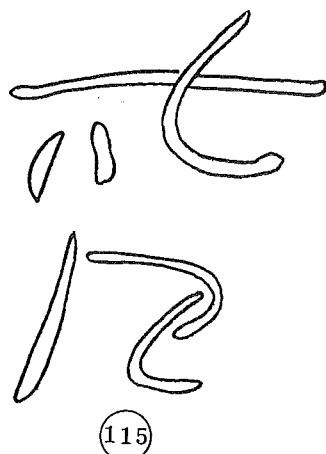
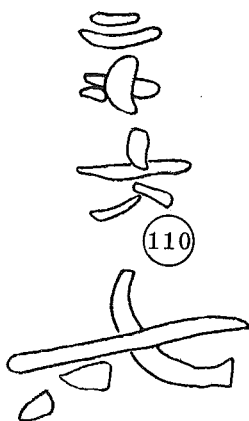
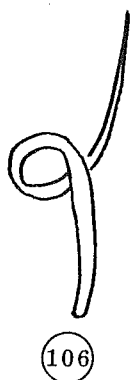
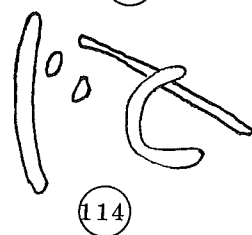
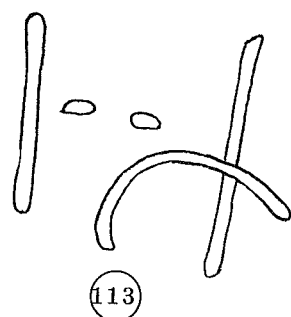
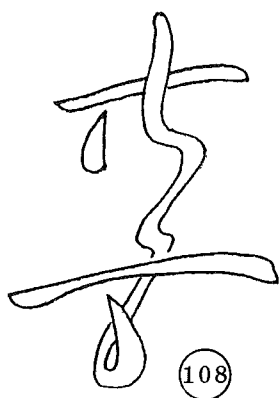
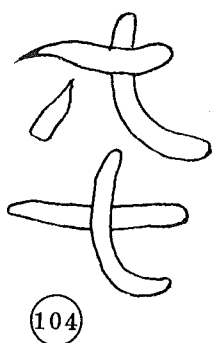
82

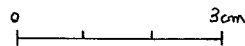
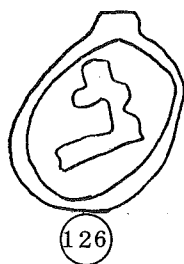
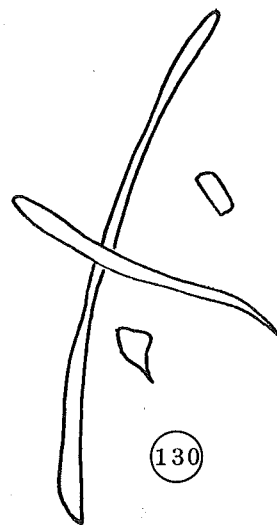
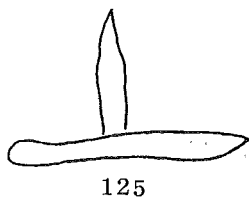
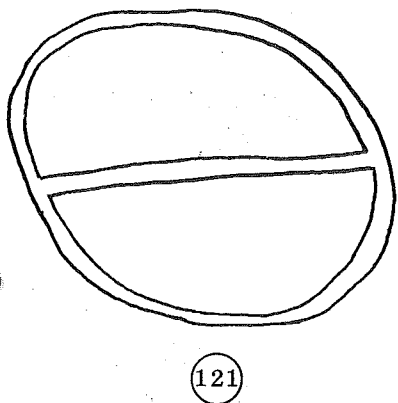
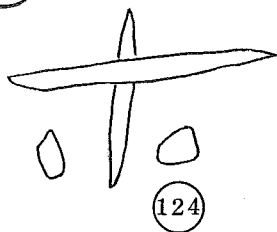
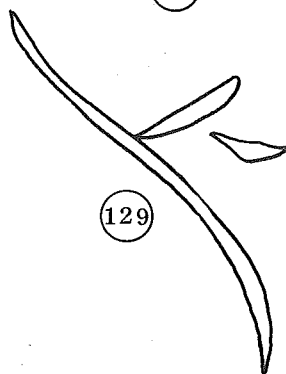
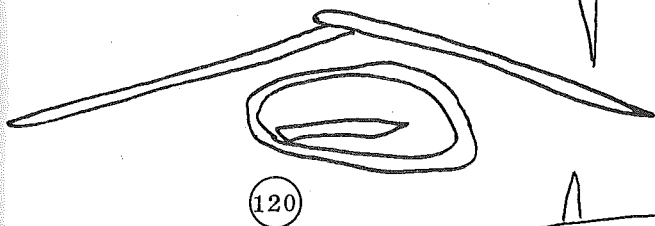
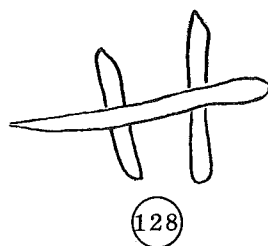
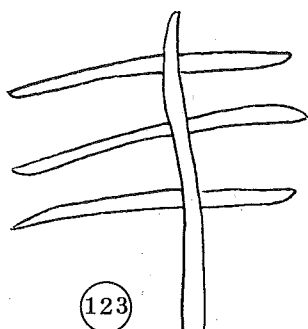
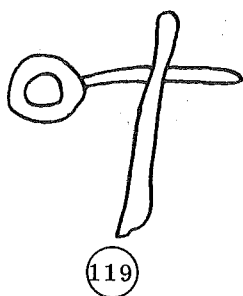
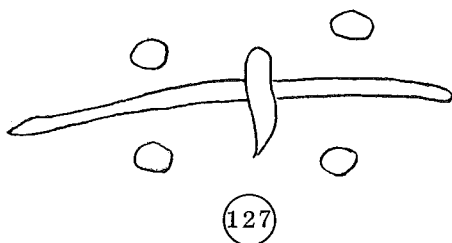
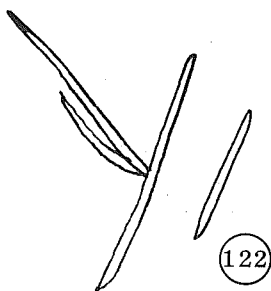
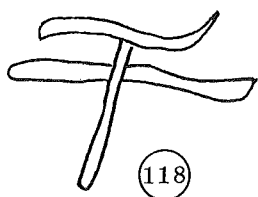


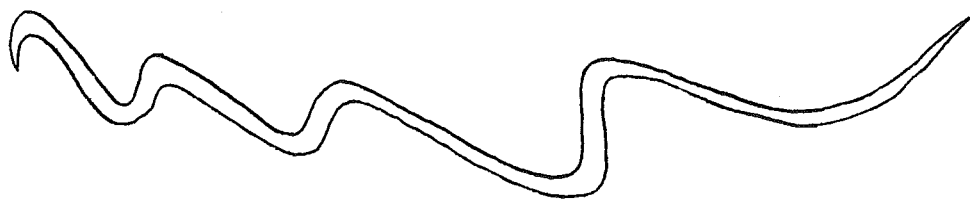
83



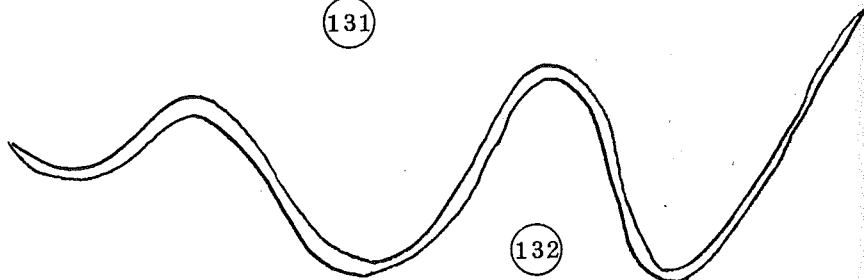




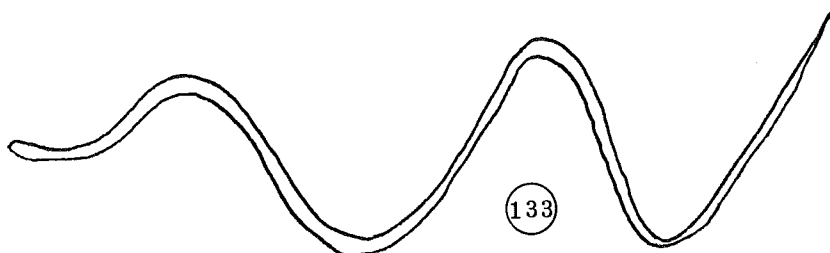




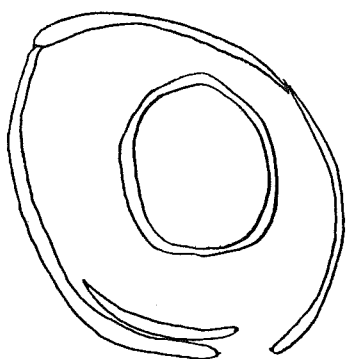
131



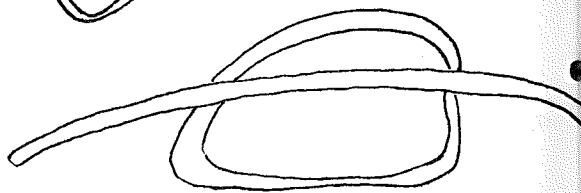
132



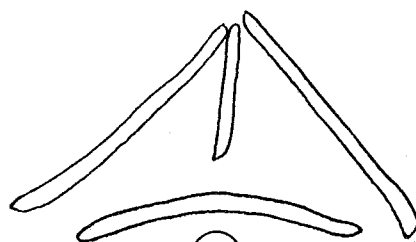
133



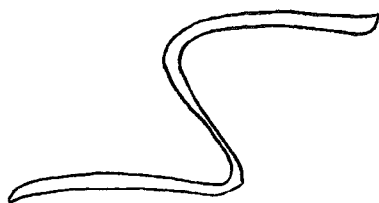
134



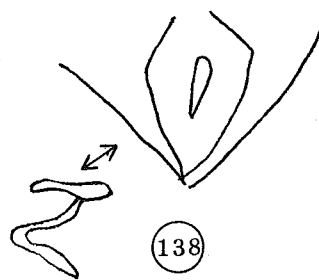
136



137



135



138



139 (注 4)



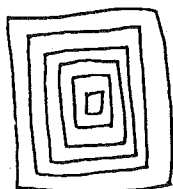
145



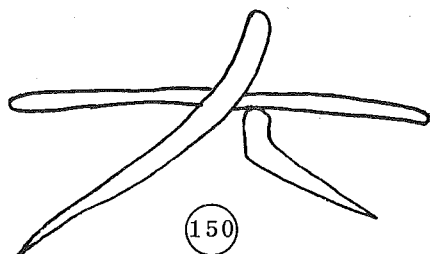
149



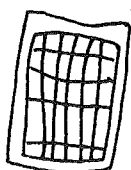
140



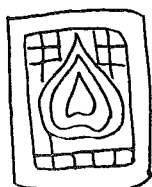
146



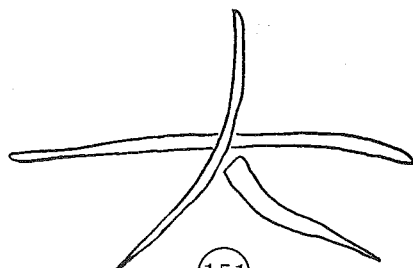
150



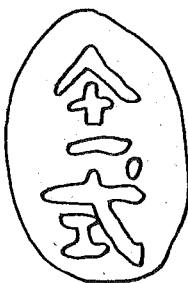
141



147



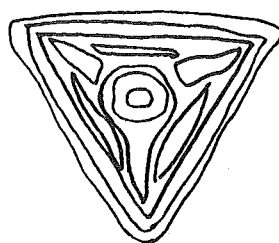
151



142



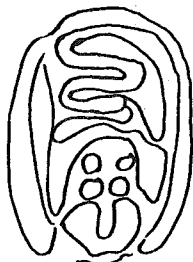
143



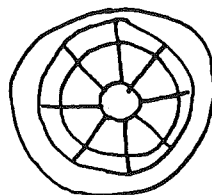
152



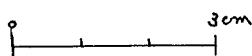
(注 5) 144

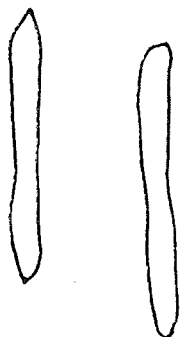


(注 3) 148

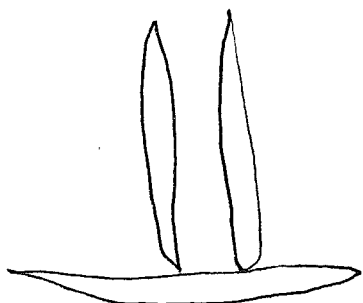


153

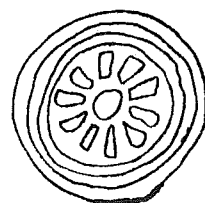




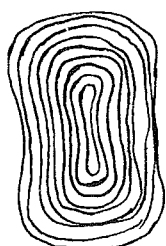
154



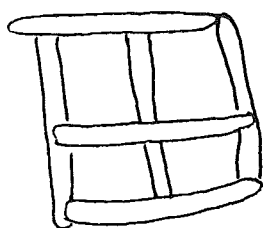
158



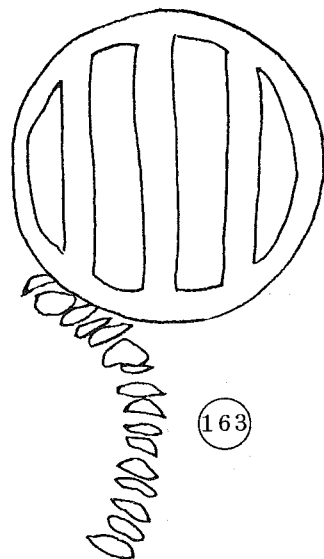
162



155



159



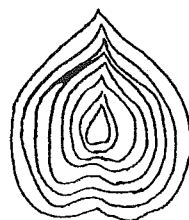
163



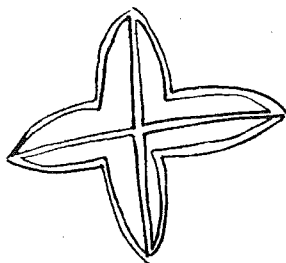
156



160



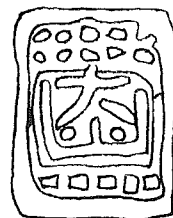
164



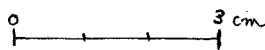
157



161



165



- (注 1) 字の向きが逆になっている
 (注 2) 152 と同一の甕にあり
 (注 3) 印判ははりつけである。
 (注 4) 文字不鮮明で判読出来ず、148 と同種の字か
 (注 5) 口辺部（口の内側に印判あり）文字不明

壺屋における荒焼の判一覧表

番号	業 者（屋 号）	判	番号	業 者（屋 号）	判
1	西 与 儀	士	26	玉 那 覇	(不明)
2	田 ノ 端	王	27	康 昌	(不明)
3	上 ノ 下	司	28	東 リ ト ケ シ 朝 定	大
4	ク シ	田	29	ク シ	全
5	先 生 島 袋	分	30	康 勇	刃
6	新 屋 敷 小	今	31	后 ノ 屋 小	天
7	上 ノ 島	王	32	マ ー チ 小	※
8	下 松 尾	今	33	小 橋 川	天
9	タ シ カ ー	(不明)	34	前 ノ 西 与 儀 小	天
10	新 屋 敷	士	35	ト ー ファ ー	天
11	東 ノ 西 敷 小	今	36	玉 井 小	テ
12	川 門 小	(不明)	37	島 袋 小	今
13	川 根	(不明)	38	ヨ ギ ノ 前	合
14	康 雄	山	39	ベ ー チ ン 小	父
15	東 リ ト ケ シ	金	㊥ この一覧表は 1967 年 6 月 17 日に壺屋 調 査 の 際、「沖縄陶器株式会社」で 得た資料である。		
16	東 り 島	天			
17	大 安 里 小	分			
18	宜 保	天			
19	前 ノ 島	米			
20	新 屋 平 田	八			
21	妊 ノ 側	合			
22	下 ト ー フ ャ 小	合			
23	川 根	合			
24	妊 ノ 側 小	サ			
25	工 場 安 里 小	合			

沖 縄 の 貝 具

上 江 洲 均

南島には種々の自然物利用の道具があるが、貝類もその一つである。考古学資料にもいろいろ見ることがある。

イモ貝やシャコ貝、夜光貝などである。それらの出土品と現在用いられている貝を利用した道具との直接のつながりについては専門家にまかせるよりほかないが、少なくとも現在用いているもの、あるいは近年まで用いられたものによって、久しい間の歴史の断絶を埋め合わせることはできそうに思う。

ここでは、貝具のいくつかを紹介したい。もっと学問的に深い考察は過去においてもなされて来たと思うが、今後のために少しでも参考になれば幸いとするとところである。

1、ニゴー (宮古池間島) (写真1)

シャコ貝の小さいもので、昔は鰯の脂を入れ、燈心をさして燃やした。形の小さいものをニゴーといひ、中間をウルガイ、大きいものをマカイといった。大きいマカイは、昔は洗面器にすることがよくあつてはやり目が治るといわれていた。

池間のウファールズのお嶽で夜ごもりの時に用いる燈明をカンのトゥーイ（神の燈）というが、その燈油皿は焼物であるか、もしくはこのニゴーである。心は木綿を用い、その端に出して燃やす。

2、ムンヌキムン (津堅島) (写真2)

やはりシャコ貝で、中間程度のものである。津堅島で、道のつき当る石垣に2枚（1個体）を外へ口を開くように向けておいたのを見た。この様なものを同島で他に4～5例見ることができた。道のつき当りだけでなく、門においている例もある。常時そうするのか、何かの兆候があつて臨時にやったのかについては調査していない。しかし中には、ブロック塀にセメントで固めたのがあることからすると臨時ではなさそうである。

シャコ貝を沖縄ではアジケーという。アジュンは交差することをいひ、歯の咬み合った状態をいうらしい。琉球青木をアザカというのも上から見た葉序が交差した形になっているからだといわれる（註1）。アザカにしろアジケーにしろ魔除けの威力があるものだという点において共通している。古くはこれを吊っておいたそうだが、（註2）今では忘れられたようで、私は津堅島の例しか知らない。

伊平屋では、アジケーには2種類あるといひ、根なしで中身が猫の毛のように斑になっているのがあり、これをマヤーアジカイというが、ふつうのものは単にアジカイと呼ぶだけである。後者は地面に生えていて、グーシ（金串）をさしこんでこじ開けてとる。

久米島仲里村真謝ではアナグーとシカヤーの2種類があるといわれている。アナグーは岩穴に入りこんでいるもので、シカヤーとは瀬の貝の意でないかとは仲原善秀氏の意見である。同村比屋定では一般的呼称でアハクーという。座間味村あたりではハクヤーである。

シャコ貝は、他にもたとえばお嶽の香炉にする例もままあり、井戸ばたで水入れにする例は多い。大きいになると、タライ代用にしたり、鍋代用にもあつたそうである。

宮古多良間島で聞いた話では、以前はお産時の胎盤をこのシャコ貝に入れて台所の裏に埋める慣わしであつたという。隣の水納島でもシャコ貝を用いたが、ここではシャコ貝に木灰をつけたエナを入れて、家の神（火の神）の裏に置いた。そして次の子の出産の時再びその貝を用いたそうである。

多良間の伝説で、つぎのようながある。「昔、大津波が来て島中洗い流してしまつた。しかるに、ブナジエとその兄だけは島の高台にのぼつて助かり、兄妹で夫婦になつた。最初に生んだのはシャコ貝で、二番目にブウ（苧麻）、三度目が人間であつた。」

この創世神話とも言うべき話の中で、最初に出産したシャコ貝はいったい何を意味するのであろうか。エナを入れて置く習俗と照らし合わせて考えると何かがつかめるような気がする。また、八重山でその昔、嬰兒の埋殺（間引き）する時、クバの葉に包み、上からアガザイ（シャコ貝の八重山での方言名）でおさえて処理したという（註3）

多良間や八重山の例からすれば、邪気を除くことのほかに、女陰を意味した要素があつたのではないかと想像する。嬰兒やエナをいま一度母のもとへ帰す思想があつたのではないか。子を産むことのできる偉大なる力は、邪気を払う威力をも同時に兼ねそなえたはずだからである。

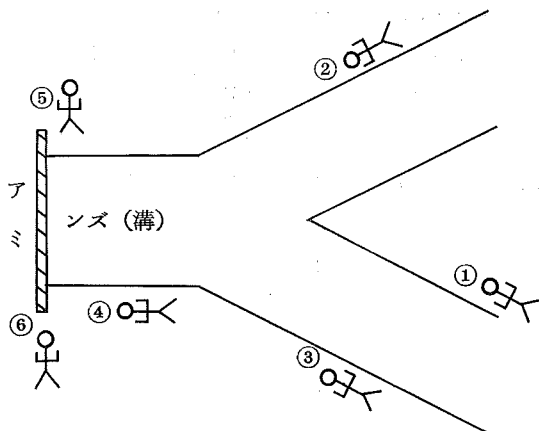
3、アジケー貝鍾 （座間味村慶留間） （写真3）

一昨年の秋、座間味村の慶留間へ渡つた時、学校横の護岸に干しているのを見て撮影した。考古学資料としてではなく、実際に用いているのを見ることができたのはこれがはじめてであつた。網の全長は10メートル前後で、高さが2メートル前後である。その裾に約30センチおきに貝鍾をつける。

この網の名称は、慶留間では獲れる魚の名を冠してクスクアミ、イラブチアミというが隣の阿嘉島では、アミジケーアミ、あるいは単にアミといっている。これについて、慶留間小中校教諭の嶺井敏子さんに詳しく調査してもらつたので、その報告から必要の部分を用いて述べてみることにする。

これはパンタタカーという追い込み漁法で用いるもので、7～8人1グループでやることが多い。内海の水深2～3メートルのところを使う。サンゴ礁の割れ目の溝になつた所を利用し、前もつて網を張っておき、数名で潜つて魚を追ひこむのである。

「①の場所の人が潮を打ちながら追う。③の場所の人は、①から来た魚が通り過ぎようとしたらすぐに潜つて追う。②の場所の人は、①より少々おくれて追ひはじめる。④の場所の人は、②③から通り過ぎたら直ちに潜り、網の方へ追う。⑤～⑥の場所の人は、魚が網に気づかない距離に近づくと、サツと



網を巻いてしまう。そしてそのまま水面へ引き上げる。息が苦しくなると網を巻いてそのまま沈め、あとで引きあげてもよい。」

以上は、イラブチ魚の追い込み法で、嶺井さんの報告文をそのまま掲載した。イラブチはすばしっこいので、クスクよりも動作を機敏にしなければならない。クスクもほとんど同じ形態の漁法であるが、動作をお

くられればよい。

この網の話は、伊平屋村島尻でも聞いたが、今ではおそらく座間味だけに残る網かもしれない。伊平屋では、この貝の山が網にかかって、扱いに難渋することがあるのでよくないといっていたが、阿嘉島では、魚がかかってガラガラ音を発するので魚をますます混乱におとし入れる利点があるという説明であつた。

なお、貝に孔を穿つには、鋭利な刃物で一気に打ちこむ。写真のハクヤー（アジケーのこと）は、海底の岩にすられていたうちにほとんど山がなくなっている。

4、スピ貝の貝鍾 （伊平屋村島尻） （写真4）

網の鍾に鉛を用いるようになるまでは、スピ貝やアジケー等の貝類を用いることが多かったようである。スピ貝とは寶貝のことで、スピとはチビすなわち尻のことであるが、本来は女陰であつたというのは多くの学者の一致した見方である。

写真の貝は、この種では大きい方で、伊平屋村島尻ではモーラといい、貝の背の部分の部分を穿って縄に結びつける。網の長さは5～6メートルほどに、高さ2メートルほどである。このモーラは長さ約7センチもある。一般には、これより一段と小さいスピ貝を用いることが多かった。

この網を島尻部落では、ワリジケアミといっている。ワリはサンゴ礁の割れ目のことで、割れ目を使う網の意である。使用法は前項の慶留間のアジケーの網と同様追い込みである。4～5名一組で、雑魚とりであるが、時にはチルマン、シチュのような一尾で2～8斤の魚を獲ることもある。しかし、チルマン、シチュはもつと長い網を持って周囲を囲む方法が多い。

スピ貝の貝鍾については、よい報告書もあるので参照されたい。（註4）

5、ブラ・ヤクン （宮古平良市） （写真5）

法螺貝製やかんのことで、宮古ではブラヤクンまたはブラヤクンという。近年まで湯沸かしとして用いていたことを宮古でも八重山でも聞いた。家庭用より畑小屋用のものが後まで残っていたようである。伊平屋では、ブラヤクンといつて寄留人部落や鍛冶小屋で見ることがあつたという。

口を上へ向けた時の胴部の中間あたり均衡のとれるところに孔を1つないし3つあけ、縄を通したのもあれば、孔を1つ穿ち、そこへカギ状の木の枝をねじこんで柄とすることもあつた。

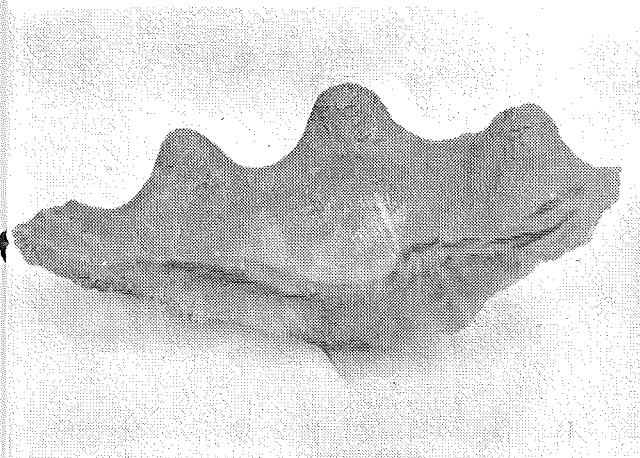
小さいので25～26センチ、大きいのは42～43センチあり、鉄製やかんに劣らないほどの容積である。このブラヤクンで煮たお茶はおいしく、病気を治す力があると信じられた。

6、柄 杓 （竹富島） （写真6）

法螺貝の胴部へ孔をあけ、木をねじこんでつくった柄杓である。

柄杓には、竹製もあるが、八重山でよく見かけるのは瓢箪をたてに二つ割りにしたものである。これを竹富でヒシャフディラ、石垣市川平や小浜その他の地方でベーラ、波照間ではカマサーという。その他宮古狩俣、島尻あたりには、アダンの幹をくったサシがあり、八重山各地にクバの葉でつくった柄杓があり、クバヌバヌ・フダイといっている。八重山西表には、クワズイモの葉で臨時につくったイモールという水汲みがある。

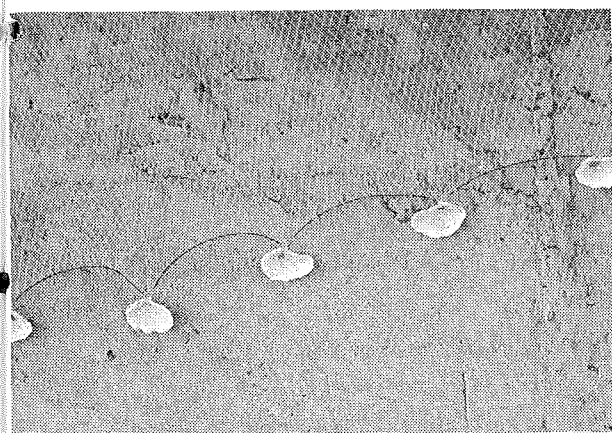
法螺貝製の柄杓は、使う上でどのようなよさや欠点があるかは知らないが、あまり例を見ないものであろう。



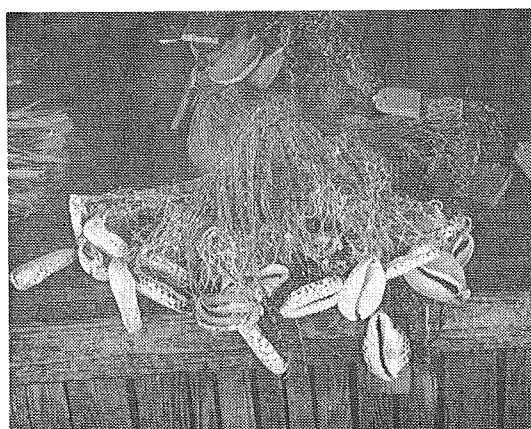
① ニゴー（宮古池間島）



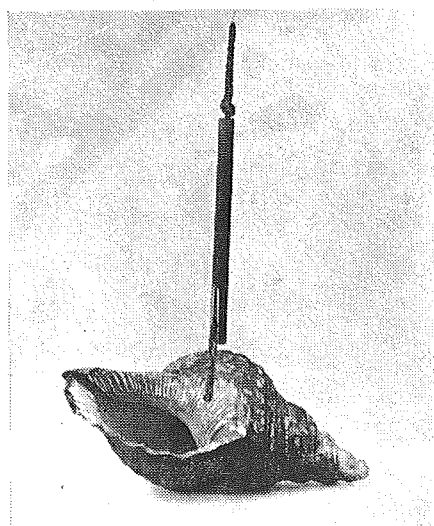
② ムンヌキムン（津堅島）



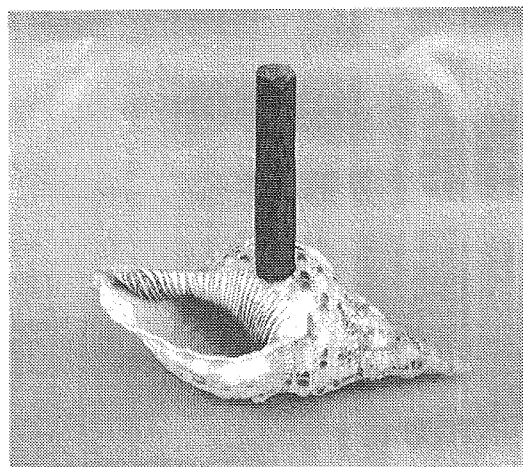
③ アジケー貝鍾（座間味村慶留間）



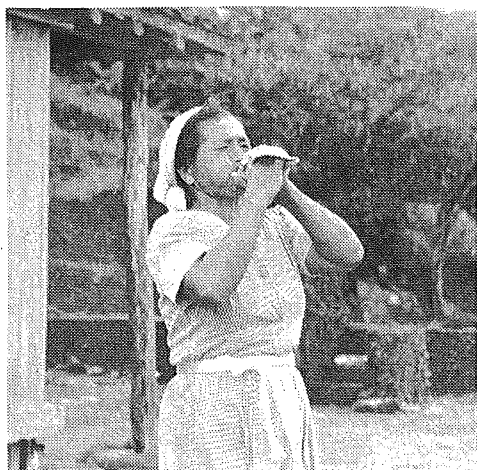
④ スビ貝の貝鍾（伊平屋村島屋）



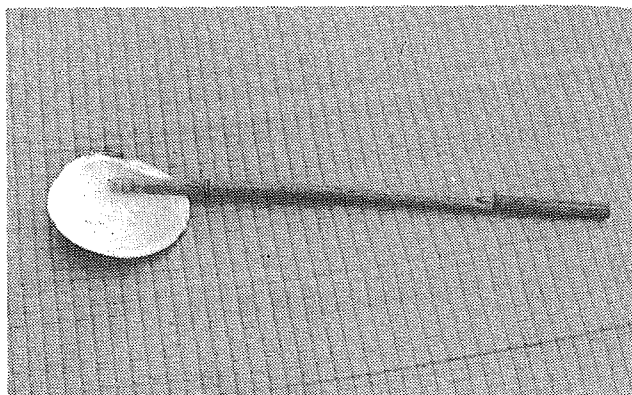
⑤ ブラヤクン
（宮古平良市）《琉博》



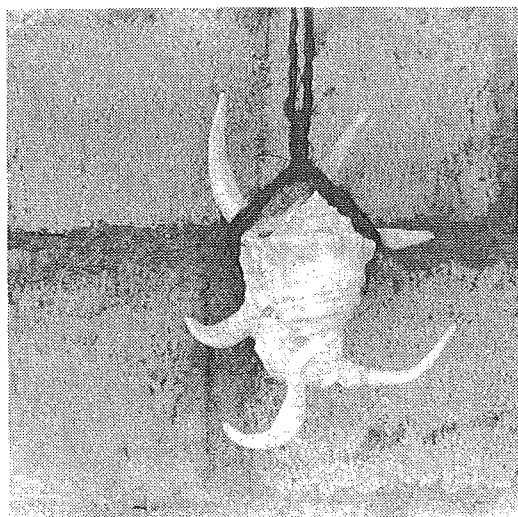
⑥ 柄杓《竹富島瓦宝院》



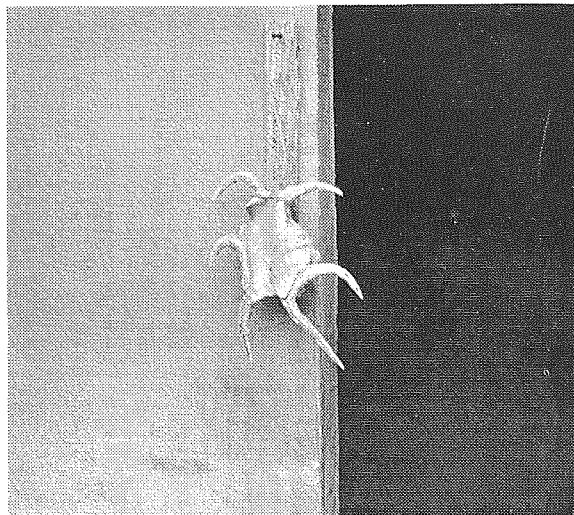
⑦ プラ (国頭村安波)



⑧ アツカイ (石垣市新川) (琉博)



ガツキヤ (かぎ) (竹富島毘宝院)



⑩ マースキムヌ (魔除け) (宮古平良市久貝)



⑪ カーミのフタ
(久米島具志川村字山里)



⑫ 皿 (宮古平良市狩俣)

7、ブ ラ (国頭村安波) (写真7)

法螺貝は沖縄でも用途が広い。綱引きの際は欠かせぬものだし、部落の青少年の報知具としてもよく利用されて来た。昔の山原船の出入港時の汽笛でもあった。猪狩りのイヌヒキ猪で、犬を呼ぶのにこの法螺を用いた。

写真の法螺は、安波部落で旧暦7月のウンジャミ祭の前日、斜面の上に位置するヌンドウンチ（ノロ殿内）で、神酒づくりに雇われて隣部落の美作というところから来た婦人が法螺を鳴らし、米を出す時間を知らせているところである。法螺を聞いて、子供たちが米をフロシキや紙袋に入れてそろそろ持って来た。部落に生活している家族ばかりでなく、那覇市その他へ出ている家族の分も一人当り一合の割で出すことになっている。それをはかるのは、部落会計である。1メートルばかりのヌキという板には表にも裏にも部落中の屋号を書いているので、その上に白墨でチェックをし、80余軒1軒残らず徴収するのである。

8、アツカイ (石垣市新川) (写真8)

アツカイは汁杓子のことである。ギガジョウという二枚貝の片方の殻でつくったものである。貝の大きさは9.2センチに10.8センチで、竹を二つ割りにし、そこへ貝を挟みこみ、竹は糸や針金でしばる。柄をつけた全長が41.5センチである。

九州や北陸でも海辺の村では用いたとの報告があるが、八重山では戦後の一時期まで用いたようだが家庭用としてより、畑小屋においでいることが多かったといわれる。

夜光貝の一部を切り取って汁杓子にしたり、八重山では、瓢箪を二つにたて割りにして用いることもあった。また海辺に流れついた柳子の実を二つ割りにし、アツカイの要領で竹の柄をつけて汁杓子とする例は伊平屋島で聞いた。

9、ガツキャ (かぎ) (竹富島) (写真9)

水字貝を逆に吊ってそのツノへものを吊るのに用いた。たとえばミノ、カサの類である。この様な例は、津堅島でも宮古の池間島でも聞いたことから考えれば、あるいは全琉的に海辺の村々で用いられたものかもしれない。

しかし、次項に述べる例からすれば、この様な用い方あるいは魔除けとしての要素を忘れた結果によるのではないだろうか。

10、マーヌキムヌ (魔除け) (宮古平良市久貝) (写真10)

水字貝を久貝部落ではユーグルといい、魔除けとして、牛小屋と山羊小屋に吊っているのを見たので撮影した。

那覇市近郊ではユーナチモーモーというそうだが、伊平屋島ではベーベナーといい、やはり畜舎の前に吊ることがある。島尻部落へ行った折、子豚が熱病のため死んだ家があったが、豚舎の軒にはやはり水字貝を吊っていた。それから1年の後再び訪ねた時もその貝はそのままにしていた。津堅島でも、その様な場合他の地方と同様、ヒル（にんにく）を畜舎の軒へ1本吊っておくことが多いが、昔は水字貝を吊ったという。

3年前、与那国で見たのはクモ貝であった。昨年奄美の沖永良部へ行った折、和泊町手々知名に養蚕をしている家があったが、門の九年母の木にクモ貝を吊っていた。この貝を沖縄では一般にマヤーンナというが、沖永良部ではナナチナブイである。

これらを吊るばあいの共通点として、上向きにし、しかも口の部分を外部へ向けることである。

11、カーミのフタ (久米島具志川村字山里) (写真 11)

一斗壺の蓋に貝を用いた例は他の地方にも見られる。一斗壺は主に味噌入れであるが、雑穀を入れて保存することにも用いられる。沖永良部島でトゥワシガメというのは一升をチュワカシ（一沸）と呼ぶのに対する十沸すなわち一斗を意味する呼称である。伊平屋村島尻でトーカーというのも全く同じ意味である。

この壺は口が小さく、やつと手が入る位だから蓋にこの様な巻貝を用いるのに適している。下に布を敷き、その上へ貝をおく。貝はタカセ貝またはヒロセ貝である。（写真のものはヒロセ貝）。伊平屋村島尻では、タカセ貝をタカジリという。これをアチグーともいうのは肉が厚いからである。これに対しヒロセ貝はヒシグーといい、肉がうすく、やわらかいという。

壺の蓋には他に木を削って作ったり、チグ（棕櫚）の幹などでもつくる。布だけでやることもあれば壺屋でつくった素焼の蓋を用いることもあったようである。

12、皿 (宮古平良市狩俣) (写真 12)

部落の旧家の神棚にお膳に 12 箇と 4 箇の二枚貝の殻をおいて、それに花米を入れて供えたものである。それを撮影したものだが、詳しいことは知らない。ただ昔からこの様な方法で供えていたらしいということである。

昔は、シャコ貝等の食器類も用いたことであろうが、今は見ることがない。津堅島では大きな巻貝の外殻の一部を削り取りそれで大根の皮削りをしていたそうである。津堅は大根の名産地で、その取合わせはおもしろい。

海に囲まれた沖縄は、海産物利用は広く行なわれていたはずである。貝殻類ばかりでなく、海石の利用もある。クムジチ石と称するキクメ石を採って来て家の礎石にした例は宮古や八重山で広く見られ、その茅葺屋や瓦葺屋との調和した美しさは、類まれであろう。

塗り物などに用いた貝細工は、すばらしいものだが、自然物をほとんどそのままの姿での用い方は、われわれの心にやさしみを与えてくれる。

註 1. 多和田真淳「古琉球の祭具——アザカガネとダシチャクギ」

(1963 年 10 月 沖縄タイムス)

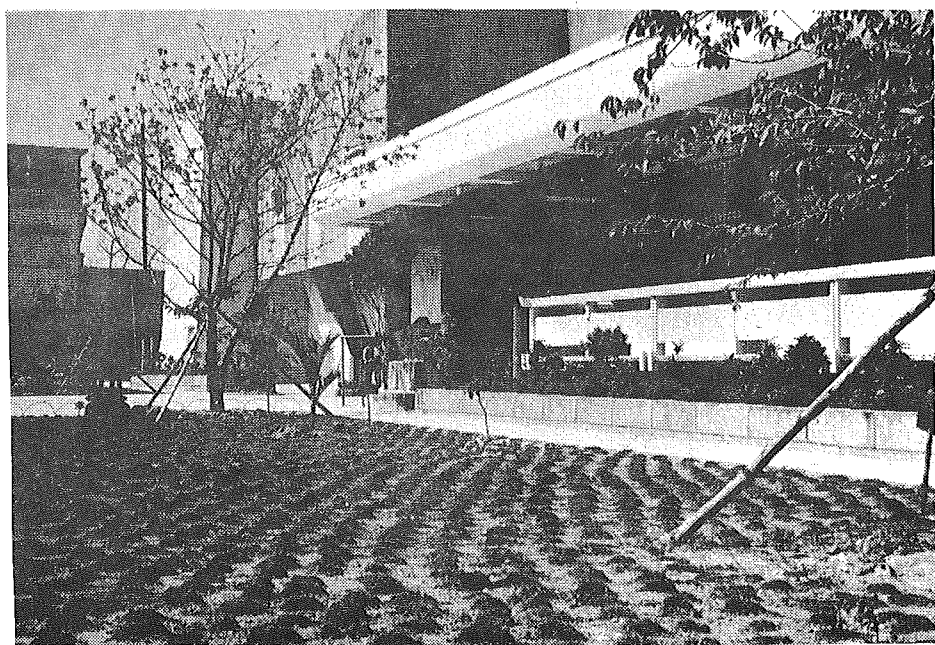
註 2. 「沖縄語辞典」(国立国語研究所) 129 頁「アジケー」の項

註 3. 大浜信賢「八重山の人頭税」123 頁

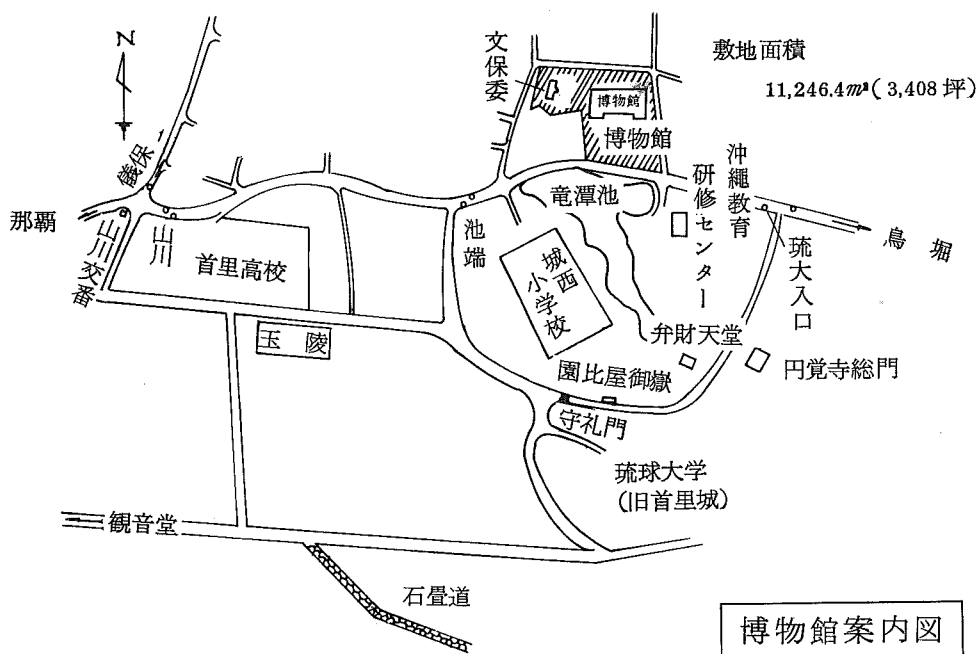
註 4. たとえば岸上興一郎「寶貝の鍾」民族学研究 35/4 など



全館風景



庭園



案 内

名 称 琉球政府立博物館（復帰後は沖縄県立博物館）

所 在 地 沖縄県那覇市首里大中町1丁目1番地 電話 32-2243

開 館 日

日・火・水・木・金・土

午前9時～午後5時（但し、入館券の発売は午後4時30分まで）

休 館 日

毎月曜日、公休日、その他陳列替等による臨時休館日

入 館 料

大 人 10 セント

学 生 5 セント

児童生徒（高校及び小中学生）2 セント

※ なお20名以上の団体見学は2割引

◎ バス……………首里バス「開南線」池端又は琉大入口停留所下車、徒歩2分

琉球政府立博物館

那覇市首里大中町1の1

琉球政府立博物館々報No.5

1972年4月30日発行

印刷 北部高

電話 052-25

持